

第3回熊本大学 東光原文学賞作品集

2011年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library



◆大賞◆

読書の国のアリス 如月

◆優秀賞◆

銀色のライター

吉川 真悟

あやかし道中

坪井 希

五月の野辺送り

虹野 アキラ

第三回熊本大学東光原文学賞作品集

第三回東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 入口 紀男／4

小説は『言葉の織物』である

—第三回東光原文学賞の授賞式にあたって—

大賞

読書の国のアリス

如月／8

(大学院薬学教育部分子機能薬学専攻二年)

優秀賞

銀色のライター

吉川 真悟／42

(教育学部中学校教員養成課程国語専攻一年)

優秀賞

あやかし道中

坪井 希／77

(文学部歴史学科二年)

優秀賞

五月の野辺送り

虹野アキラ／111

(法学部法学科二年)

選考を終えて

小野 友道「総評」／146

西川 盛雄「講評『表現者として言葉を磨く』ということ」／149

岩岡 中正「選評」／152

小説は『言葉の織物』である

―第三回東光原文学賞の授賞式にあたって―

附属図書館長 入口 紀 男

第三回東光原文学賞授賞式は、去る一月十七日正午から附属図書館二階の館長室でとり行われた。大賞一名、優秀賞三名の学生に表彰状と副賞がそれぞれ手渡された。記念撮影の後、受賞者は、新聞記者のインタビューに応じて受賞の喜びなどを語った。受賞者の氏名・所属と受賞作品名は、新しい附属図書館報である「東光原ニューズレター」創刊号（平成二十三年一月刊）の表紙に掲載された。ここに、東光原文学賞の第三回の事業が完了したことを報告する。

東光原文学賞は、附属図書館が主催して一昨年度始められたものである。前館長である田口宏昭副学長におかれてはこの意義深い事業を残していただいたことに改めて敬意を表する。

第三回東光原文学賞においても、応募資格者は本学学生とし、大学院生および留学生を含むこととした。またジャンルを昨年度と同じく「小説」とした。募集期間を平成二十二年五月三十一日から十月二十九日までとした。この間に二十五編の作品が投稿された。そのうち十一編は、医学部、理学部、工学部、薬学部などの学生からの投稿であった。



ご協力いただいた全学の関係各位と、附属図書館運営委員の先生方、そして数ある作品の中から特に優れた作品をお選びいただいた選考委員会の小野友道委員長（熊本保健科学大学学長）、西川盛雄名誉教授、岩岡中正法学部教授にあつく御礼を申し上げます。また、この事業のために特別のご尽力をいただいた島田正俊教育研究推進部長、永田正次図書館ユニット長、成田和則チーフリーダーをはじめ、附属図書館関係各位に対して真にその労をねぎらう。

この地上で、言葉はいつできたのであろうか。古代の人々は、風や木の葉に宿る精霊と交信したであろう。言葉が生まれたとき、人々にとって言葉は人のたましいそのものであった。文字が使われるようになったとき、文字には、その一つひとつに神さまが宿った。それはつい昨日のことであった。現代でも、日本の多くのご家庭では、辞典を踏み台にすると親に叱られるのではないだろうか。

小説は言葉でできている。良い音楽を聴くとき、音の一つひとつに美しさがあるように、良い小説は、言葉の一つひとつに深い意味があり、また文章の一つひとつに美しさがある。小説は、言葉の織物なのである。昔の人々は、文章の一つひとつを味わって読んだ。深く味わって読む人のために、小説世界は目的として実在する。

学生の立場で小説を書くという仕事は、どちらかというと言葉の分野に属する。それは確実に教養を深くする。

教養とは、知的存在者でありたいと思う人が、ただそれだけの理由で身につけようとする知識であり、感性である。ドイツ語で実学のことを「プロット・ビッセンシャフト（パンを得るための知識）」というが教養はパン（職業）を得るための知識とは異なる。もっとも、卒業後においしいパンを得るためには、専門的な知識を身につけることも必要であろう。

しかし、真の教養は大切である。どのように素晴らしい専門的な知識も、豊かな教養の海に浮かべなければ、わが人生の将来において本当の意味で活かされることはないであろうから。

小説を書くには、四割の意志と、三割の努力と、二割の才能とそして一割の運（出遇い）がものを言う（と私は考えている）。東光原文学賞のレベルは、今年



上段：小野	西川	入口	岩岡
上段：虹野	吉川	如月	坪井

度（第三回）も、過年度と同じく非常に高いものであった。今回惜しくも入賞できなかった作品も、すべて優れた個性をもって輝いていた。私は僭越ながら、本学学生のもつ言葉づくりの資質と、それを支える確かな人間力において非常に明るい未来をひそかに感じるものであった。この文学賞が、さらに多くの学生に周知され、毎年多くの優れた作品が投稿され、附属図書館の事業としてさらに発展することを切に願う。

読書の国のアリス

如月

アリス、というのが私の名前だ。

その西洋風のコシックじみた響きは、地味な和風の名字にひどく釣り合いだ。級友にからかわれた経験も少なくない。けれど概ね、私はこの名前を気に入っている。響きは悪くないと思うし、人に名前を覚えてもらいやすいから。

幼い頃は、私もウサギ穴に落ちてしまうのかしらとか、鏡の向こうに迷い込んでしまうのかしらとか、色々と空想に耽ることも多かった。けれど結局その空想は、空想のまま終わった。ガイド役の白いウサギが私の元を訪ねて来ることはなかったし、毛糸玉でじゃれる猫を飼っていたわけでもなかった。私の幼少期は不条理な異世界に縁のないまま終わりを迎え、自己と他者との複雑に入り組んだ少女時代へと続いて行く。

空想を失った世界は退屈。

そこには論理と秩序ばかりが横行して、想像力を差し挟む余地なんか、少しだって残されていない。

不思議の国と同じように、現実だって不条理で満ちている。私の知らないルールで動き、私の知らない常識を盲信する人々で溢れ返っている。価値観の押し付けのひとつひとつに、私は癩癪を起こし、もっともらしく理由付けをしながら、出口を探している。どこから歩き出せば、この嫌な夢から抜け出すことができるんだろう。

でも、ねえ、アリス？

そんな声が聞こえるのを、私は心のどこかで恐怖し続けているのかもしれない。

君は、赤のキングが見ている夢に過ぎないんだ。王様が飛び起きてしまえば、夢の登場人物である君なんて、跡形も残らない。けれど、赤のキングが寝ている場所が、君の夢の中だとしたら？ その虚しい入れ子状態を、君はどう判ずるべきだと思う？

まだ空想に耽ることの多かった幼い頃、私の世界は本で溢れていた。

本は素敵。

文字の羅列が連なっているというだけなのに、そこには物語が封じ込められている。まるで世界がひとつ、すっぽりと収まっているみたいに。

ページを繰ると、それぞれの場面は私の前に、色鮮やかに浮かび上がる。私にとって、本は扉だった。扉の鍵は、私の中にある想像力。扉を開けばいつだって、私はその世界に飛び込んで行くことができる。主人公と一緒に竜を倒し、姫君に恋をし、素敵な男の子に憧れ、難解な謎を解くことができる。

様々な物事を、私は本から学んだ。読書とは追体験だ。本を広げて字面を追うことで、様々な経験や感情を身体に呼び起こすことができる。私が実年齢よりもずっと大人びていたのは、きつと読書に拠るところが大きい。そのせいか、同年代の友達と一緒にいてもどこか物足りなさを感じてしまって、私は引きこもって本ばかりを読み漁っていた。

思い返してみると、自分で自分のことが可笑しくなってしまう。なんて可愛げのない子供だったんだろう。

そんな子供だったから、私にとって図書館とは夢のような場所だった。一生掛かっても読み尽くせないくらいに大量の本が整然と並んでいて、それらにはひとつずつ、世界が閉じ込められている。そのうちのどれを読んでも、咎められることはない。その空間は、香ばしさにも似た本の匂いに包まれている。

私にとってのそれは、物語の匂いだった。

*

そこは箱庭の町だった。

周囲を山と森で囲まれた、窮屈な田舎町。そう広くない敷地に、学校もスーパーも市営プールも民家も、ぎゅうぎゅうと詰め込まれている。メインストリートと言えば、町の中央を通る商店街の一角だけ。そこから少し歩けば、もう稲穂の絨毯ばかりが見えて来る。そのこじんまりとした有様が、まるでミニチュアみたいだと、当時の私の目には映った。

その山間の小さな田舎町に、私は半年間だけ暮らしていた。

父の仕事の都合で、小学生の間は転校ばかりを繰り返していた。だから、私には幼馴染がいな
い。うんと仲良くなった友達とも、手紙を二、三通遣り取りしたきり、縁が途切れてしまう。幼
い子供がいつまでも過去を引きずることはない。彼らには前途の明るい未来ばかりが開けていて、
いつだって今を甘受することだけにしか興味がなくて。過ぎ去った昨日なんて、壊れてしまった
玩具みたいに価値のないものだから。

だからその小さな田舎町も、私の髪をほんの一瞬だけなびかせて通り過ぎた、たったそれだけ
のつむじ風でしかない。

それでも、私は時折その箱庭の町を思い返す。きっと意地悪なつむじ風が、私の麦わら帽子を
取り上げて、はるか後方へと飛ばしてしまったのだ。長い髪の引き寄せられる方向へ、私は振り
向く。振り向いた後ろに、その記憶は確かに存在していて、ずっと遠くの木に引っ掛かっている。
私の背の届かない、高い木の枝に。

思い出をそっと引き出しから取り出すとき、その図書館はセミの声で溢れている。

児童閲覧室の窓は大きく開け放たれていて、真夏の強い日差しが、視界は滲むほどに明
るい。風通しが良かったことをよく覚えていて。夏の爽やかな風が私の肌を撫ぜるように吹き込
んでいる。そして私は、そんな当たり前のことに注意を向けることもなく、ただ本の中にある世
界に夢中だった。

田舎町の図書館はそう広くはなかったけれど、少女だった私には宝の山に見えた。夏休みに入って退屈な授業を受ける必要がなくなると、私は毎日のようにそこへ通い詰めた。お目当ての本を見繕っては床に広げ、その上に覆いかぶさるように読み耽る。剥き出しの素足に触れるざらざらとしたカーペットの感触が心地良かった。

その頃読んでいた本の中で、「メニム一家の物語」が特に印象に残っている。等身大の動く人形たちが人間ごっこをしながら暮らすという、一歩間違えばホラーに分類されてしまいそうな児童書だ。劇中の彼らは、自分たちが異形の存在であることをよく承知していて、だから表を出歩くことはない。物語のほとんどは屋内の描写ばかりで占められている。その閉塞感が、きっと私の好みだったのだろう。

物語には終わりがある。

必ず最後のページがあって、必ず少女は夢から覚める。お話は頭から尻尾の先まで既に決められていて、イレギュラーは起こらない。その窒息しそうな窮屈さが、私を縛り付けるのだ。安堵の海へ。

「うええ。文字ばかり」

そんな声が頭上から降って来たのは、私がアップルビーの情熱的な赤髪の描写にうっとりと空想を巡らせていたそのときだった。

「何が面白いのか、ちっとも判んねえ」

不躰な文句に顔を上げると、そこにはひとりの少年が立っていた。短く刈られた髪は、彼の活発さをよく表していた。勝ち気そうな瞳が細く歪められ、まるで汚い物でも見るかのように私に注がれている。半袖に半ズボン。田舎にありがちな、真夏の少年だった。

「すごく面白いよ？」

「絵のない本なんて、俺は嫌いだ」

「ええ……。でも……」

私は目を丸くしながら、口を噤んでしまった。本が嫌いだなんて、想像すらしたことがなかった。だって絵がないからこそ、空想の余地があるはずなのに。

「本なんて嫌いだ。漫画のほうがいいがずっと面白いに決まってる。それとか、テレビとか」

「本のほうが絶対に面白いもん」

「字ばかりだと、すぐ眠くなるし、つまらない」

「そんなことないもん！」

私はだんだん腹立たしくなって、少年の粗を探し始めた。

「キミだって持ってるじゃない。本」

人差し指をぴんと突き出して、少年が抱えている一冊の本に向ける。ウェルズの「タイムマシン」だった。

「読みたくて持ってるわけじゃない」

「読みたくもない本を、どうして持ってるの？」

「夏休みの宿題。読書感想文だよ、かったるい。……でもこの本は面白そうだ。すごい未来に行く話なんだぜ？」

もちろん知っていた。

話が大きすぎてあまり好きになれなかった本だったけれど、少年の興味はそそられたらしかった。

「その人の本なら、向こうに——」

もっと面白いのがあるよ。

そう言いたかった。

同じウェルズでも、エブリデイマジックの色が濃い「魔法の店」のほうが、ずっと私の好みだったから。

けれど私の言葉は、少年の大きな声にかき消された。

「お前、ガイジン？」

彼は、はしばみ色の私の髪と、薄い茶色の私の瞳を、無遠慮に見つめていた。名前と同じくらいに奇異な私の容姿は、いつもそうやって人の目を引き付ける。

私は世界から切り取られている。

西洋の血が混じった私の容姿は、日本のどんな風景にも釣り合わない。田舎の田園風景にも、神社の鳥居の下に立つときも、雑踏を歩く日常的な場面でさえ。まるで間違い探してみたいに、私はいつも周りから塗り分けられる。

無遠慮な視線には慣れていた。人と違う毛並みで生まれたことを疎んじたことはない。だって、私はこのカタチで生まれたんだから。

「ガイジンじゃない。日本人だよ」

「でも、変な髪の色だぞ。それから目も」

「うん。日本人なのは四分の三だけだから」

「よんぶんのさん？」

「分数、知らないの？」

わざと意地悪そうに言ってみると、少年は憤慨したらしかった。馬鹿にするな、知ってるよ。そう言いながら、形の良い眉を寄せてそっぽを向く。

「……でも、まあ、いいや。俺は今から、すごくいいところに行くんだから。お前なんかと無駄話してる暇はない。じゃあな！」

彼はすぐに機嫌を直して、抱えていた「タイムマシン」を書棚の適当な位置に押し込んだ。

「ちゃんと元の所に戻さなきゃダメだよ」という私のお説教は、少年の思わせ振りの物言いにつられて、掻き消えてしまった。

「いいところって何処？」

「ガイジンには教えない」

「ガイジンじゃないったら」

食って掛かる私を、彼は軽くあしらいながら、仕方がないから教えてやる、と偉そうに胸を張っ

た。得意げに目を細めながら、彼ははにかんだように笑う。

「不思議の国だよ」

*

不思議の国なんてない。

あるのは退屈な現実だけで、忙しない目の前の毎日だけで。ウサギに導かれて飛び込んだ先は、空想という名前が付いた現実逃避なんだから。

そんな世知辛いことを、その頃から考えていたわけではない。けれど、薄々予感していたんだと思う。だから私には、少年の言葉を信じることができなかった。

不思議の国なんてない。

ううん。あってはいけない。それは御伽噺の中にしか存在しない架空の国であって、本のページを繰るといふ尊い作業こそが唯一のウサギ穴なのだ。だからこそ、物語とは至高の存在なんだから。

だから、歩いて行ける不思議の国なんて、あるはずがないんだ。

あの頃は、毎日が日曜日みたいなものだった。申し訳程度の学校生活の他は、余白部分で満たされている。自由帳みたいにただ真っ白なそこには、罫線すらも存在しない。何を描いても許される。

今ならきっと戸惑うに違いない。何を描いてもいいだなんて、過剰な自由はひとつの苦行だ。

ルールの存在しない生活空間は、ただの不自由でしかない。けれど、当時の私はそこに何の疑問も抱かなかった。

それでも夏休みはやっぱり特別で、私たちは開放的な、どこか罪深な気分になりながら毎日をおくす。

図書館通いを日課にしていた私は、「タイムマシン」を借り出さなかった彼と、毎日のように顔を合わせるようになった。日曜日の連鎖の中で、私と少年は次第にその親密さを深めて行った。「アリス？」

私の名前を彼が知ったのは、邂逅から一週間も経った日のことだった。思えば、あの頃は不思議だ。名前も背景も関係なく、誰かと心を通わせることができた。

「変な名前。やっぱりガイジンなんじゃねえか」

「そうだね。四分の一だけね」

「よく判らないけど、お前いまにも消えちまいそうだな」

「消えてしまいうさ？」

「うん。色が無い。薄いついていうか、淡いついていうか」

少年にとっての髪や目の色は、黒いことが絶対不変のルールだったに違いない。異国じみた淡い髪の毛は、「色が無い」と見えるのも無理からぬことだった。

ちっぽけな少年。

ちっぽけな箱庭ににらみを利かせていて、その小さな箱庭こそが世界のすべてだと信じ切つて

いる。

私は少しでも、彼のことを羨ましく思った。此処が自分の帰る場所だと、疑いもせずに帰属することのできる世界を、彼は持っている。転校を繰り返す私に、そんな居場所は与えられなかった。

「消えるなよ」

ぼつりと零すように呟いたときの彼の横顔を、まだ覚えている。連れ立って図書館を出て、家路が分岐する間際のことだった。彼の視線はどこか遠くに向けられていて、真夏の夕暮れの強い日差しが逆光になっていて。だから彼の表情は読めなかった。

けれど、ぶっきらぼうな口調は優しさに満ちていた。

「そのうち不思議の国に連れて行ってやってもいい。だから、それまでは消えるな」

何かが突然に失せてしまったり、突然に現れたり。そんな唐突な筋書きを、あの頃の私たちは疑いもなく受け入れていた。その恐怖までも共に抱き込んで。

それは強さだろうか。

非現実をすぐ傍に置くことは。

*

バーネットの「秘密の花園」は、今でもお気に入りの一冊だ。謎に満ちた館や花園を、メアリーが持ち前の行動力で明るく照らして行く。それをドキドキしながら見守ったのも、この頃のこと

だった。

私ならどうするだろう。

そういう空想に浸らせてくれるのが、良質な物語の条件だと思う。荒れ地に建つ陰鬱な館にひとり放り込まれたら、私ならどうするだろう。メアリーのように行動することができるだろうか。

田圃の畦道を、私と彼は肩を並べて歩いていた。

つばの大きな麦わら帽子を、私はかぶっていた。外出するときいつも「かぶって行きなさい」と母にうるさく言われる、青いリボンの付いた麦わら帽子。それに、水色のギンガムチェックのワンピースを合わせて……ほらね。これですっかり、異国の女の子の出来上がり。この田舎町になんか、ちっとも相応しくない。

反対に、少年はこの世界にすっかりと溶け込んでいた。黒いタンクトップに、デニム地のハーフパンツ。青い稲の海を背景に、彼は夏を身に纏っている。

よく日に焼けた彼の小麦色の肌は、私の病的なくらいに色白な肌と好対照だった。私たちは手を重ねてそれを見比べ、そして笑い合った。

私が珍しく外を歩いているのは、彼から「不思議の国」への招待を受けたためだった。

「不思議の国に行きたいか？」

彼の問い掛けは唐突だった。

いつだって彼は唐突だった。出会ったときも、話題を変えるときも、本をぱたりと閉じて外に

飛び出して行くときも。最初のほうこそ、いちいち戸惑ったり、置いてけぼりにされて泣きそうになったりしていたけれど、その頃にはもう慣れっこになっていた。

「別に。行きたくない」

そのとき私は例によって読書に夢中になっていて、床に広げた本から顔を上げることもしずくに返事をした。ルイスの「ライオンと魔女」で、アスランが窮地に陥る場面を読んでいたからだ。

「嘘つき」

「嘘なんてついてない。本を読んでも、ずっと面白いに決まってるもの」

私のその言葉に、少年はむっとして唇を曲げた。ようやく本から顔を上げた私と、視線がかち合う。

「絶対に不思議の国のほうが面白い」

「不思議の国なんてないもん」

「あるよ！」

「絶対に？」

「絶対に」

「絶対に面白い？」

「絶対絶対面白い！」

「嘘ついたら？」

「針千本だって何だって、飲んでやるよ」

私と同じくらい、彼の頑なさも相当なものだと思う。似た者同士、気が合ったのかもしれない。田圃道を抜け、私たちは山道を更に歩いた。

頭上には木々が腕を伸ばしていて、夏のきつい日差しを遮っている。そのせいか、森の中は涼しかった。道は徐々に細くなり、道とも呼べないような獣道へと変わって行く。やがて隣合って歩くことができなくなり、私は彼の黒いタンクトップの背中を見ながら歩いた。剥き出しの肩に、木漏れ日がまだらに降り注いでいた。

「ねえ、何処まで行くの……？」

私は喘ぐように息を切らしながら、彼の背中に話し掛ける。彼は歩くのが早くて、私は付いて行くのに一苦労だった。いつも山や川を遊び場に行っているであろう少年に対して、私は室内で本ばかり読んでいる。体力の差は歴然だった。

「なんだ、もうへたばったのか？」

「……別に、そういうわけじゃない」

からかうような彼の声音に、私は強がりと言った。

それでも彼は道を逸れて、近くの小川の岩場に私を連れて行ってくれた。湧き出したばかりの冷たい水を飲むと、それが身体の隅々にまで行き渡るのを感じる。使い慣れていない足はじんじんと痛み、呼吸が落ち着くまでには時間を要した。その疲弊は、けれど不思議と爽やかだった。

「行けるか？ また今度にしてもいいけど？」

「行く。折角此処まで来たんだもの」

私のそんな負けず嫌いに、彼は嬉しそうに笑みを向けた。

「よし、頑張れ。もうちょっとだから」

木の枝をかき分け、私たちは更に森の奥へと進んだ。

やがて、進行方向に目的地が見え始める。緑色の有機物ばかりが溢れたその場所にあってはひどく不釣り合いな、無機的に光を反射するそれ。

辿り着いた森の奥にあったのは、視界を覆うほど大きな金属製のフェンスだった。白く塗られた金属の棒が、縦にいくつも連なっている。フェンスは見上げるほどに背が高く、また、端が見えないほどにずっと遠くまで続いている。そのフェンスによって、私たちの道行きは遮られていた。

「行き止まりだよ？」

私はそのフェンスに近寄って、白い棒を握り込んだ。それなりに年季ものであるらしく、緑色の蔦植物が無数に絡まって葉を伸ばしている。そのせいで、柵の向こうは見えない。幾重にも蔦の絡まったその有様を、少しだけ秘密の花園みたいだと思った。

「行き止まりじゃない。ゴールだ。ほら、こっち」

少年に導かれるまま、柵沿いにしばらく歩いた。すると、フェンスの一角が、蝶番で開閉できる出入り口になっている箇所が見えて来る。彼はそこから中に入るつもりらしかったけれど、それは南京錠で封じられていた。

「鍵が掛かってるから入れないよ」

「いちいちうるさいヤツだな。黙って見てろよ」

彼はハーフパンツのポケットを「そこそこまさぐって、そこから一本の細い針金を取り出した。そして、それを自慢げに私の目の前でちらつかせて見せる。

「針金？」

「簡単な鍵ならこれで開けられるんだ。兄ちゃんに教わった」

今から思えば、なんて手癖の悪い少年なんだろう。でも当時の私は、彼の指先に目を輝かせた。「それが花園の鍵なんだね」

彼は慣れた手付きで針金を南京錠に差し込み、がちゃがちゃとその奥をかき混ぜた。彼の手先や、肩が揺れる様子を、私はしゃがみ込んで眺めた。

やがてカチリと、世界の境界が壊れる音がした。

葛の絡まった鉄柵の扉が、軋みを上げながら開いて行く。「不思議の国」で私が最初に目にしたのは、巨大なメリーゴーラウンドだった。

そこは遊園地だった。

ただし、もう二度と賑わうことのない、棄てられたそれ。

箱庭の町を山の裏側だとするなら、表側はそれなりに幹線道路が通っていて、交通の便は悪くなかった。遊園地は俄か景気に煽られて造られ、その泡の弾けるのに併せて、あっという間に廃れ、寂れて、ついには儚く命を散らした。

私が立っているのは、その死骸の上だった。

「……すごい」

溜息のような声が漏れた。私は目をいっぱいに見開いて、その空間を見渡した。どこまでも続く石畳の遊園地はただ広く、ただ無人だった。

ひっそりと静まり返った無音の遊園地に、いくつもの建造物が乱立していた。それらは霞んでしまうくらい遠くにあっても、吸い付けるかのように私の視線を奪う。

「言っただろ？ 図書館よりも楽しいって」

彼が零れるような笑顔で得意げに言うのを聞いて、私は素直に頷いていた。いつもなら憎まれ口のひとつでも叩いていただろうけれど、そのときは思い付きもしなかった。私の頭はそのくらい、興奮にまみれていた。

電気の通わなくなった遊具が動くことはない。小さな観覧車も、ジェットコースターも、メリーゴーラウンドも、それらはただ灰色のオブジェだった。売店のシャッターが開くことはないし、ブルは干上がったまま。そこはあくまで廃墟で、遊園地はただ死に続けている。

別に構わなかった。

静止した巨大な機械が並ぶその場所は、死んでいても十分に夢のような世界だった。

私は駆け出した。サンダルをばた言わせながら、足の向くままに遊園地を走り回る。落ち着きなく首を巡らせながら、私は自然に笑顔を零していた。こんな素敵な空間に、私と彼のふたりしかない。今この瞬間に、この不思議の国は私たちのものだ。

遊園地をあらかた見て回って、それだけですっかり疲れ切った私に、ゆっくりと歩いて来た彼が追いついた。

「さあ、まず何をする？」

「メリーゴーラウンドに乗る！」

「……動かないぜ？」

「それでもいい！ 私、乗りたい！」

そうやって、私たちは日が暮れるまで遊んだ。動かない遊具に乗ったり、ゲームセンターを見て回ったり、追いかけっこをしたり、疲れ果ててベンチに座り込んだり。楽しい時間は矢のように過ぎて行く。それはきっと、一秒も捨てずにその瞬間を生きているからだ。

遊園地の中央にある巨大な時計塔だけはまだ動いていた。その針が帰宅の時間を指したとき、私たちはどちらからともなく、明日も此処に来ることを固く約束していた。

その日以来、私たちはたびたび不思議の国に行って遊んだ。森の奥深くにある、静寂の支配する遊園地。その遊園地のことは、ふたりだけの秘め事だった。図書館で待ち合わせて、目配せをするだけで私は本を閉じる。

不思議の国で遊んでいるとき、私の身体はまるで夢の中にいるかのように、幸せな浮遊感を纏っていた。

*

どうして物語の主人公は、みんなして赤い髪の毛をしているんだろう。アップルビーも、アンも、情熱的な赤い髪をしている。「はしばみ色の髪の毛の女の子」なんて、到底主人公にはなれっこない。私の髪も赤ければよかった。どうせ黒髪でないのなら、せめて。

彼が不思議の国へ誘ってくれなくなったのは、夏休みも半ばを過ぎた頃からだった。夏は緩慢に終わり始め、アブラゼミよりもヒグラシが声高に鳴いていた。

それでも私たちの日曜日の連鎖は繰り返されていた。

私は相変わらず本の虫で、図書館に入り浸って物語の海に溺れていた。彼は「タイムマシン」をとうに読み終えた様子だったけれど、色々と理由を付けては私に会いにやって来た。

「今日は何を読んでいるんだ？」

「オリエント急行殺人事件」

「殺人事件！」

「うん。オトナ版は難しくて読めなかったけど、これは子供用に翻訳されてるみたいだったから」

私たちは会話を交わし、笑い合い、からかい合いながら、無限にも似た時間を享受し続けた。

日曜日の連鎖の中で、傍らにはいつも彼がいた。彼の笑顔があった。

「ねえ、また行きたい」

「……何処に？」

そう問い返す少年の表情に、微かな怯えと後ろめたさが混じっていることを、当時の私は気付くことができなかった。

「決まってるじゃない。『不思議の国』だよ」

私は唇を尖らせた。彼はとくに判っているくせに、意地悪を言っているのだと思っていた。だって、私が図書館を出て行きたがる場所なんて、他にないじゃないか。

「……ダメだ」

「どうして？ 私、行きたい！」

「もう飽きたんだ。だって、動かないジェットコースター眺めると、動くヤツに乗りたくて堪らなくなってる来るだろ？」

彼は困ったような顔をして、子供じみた言い訳を口にした。そして、繕ったような笑顔を浮かべて言い募る。その笑顔はちっとも素敵に見えなくて、私は嫌いだった。私が好きなのは、そんな表情じゃない。

「それよりも、次は俺たちの秘密基地に連れてってやるよ。全部俺たちで作ったんだ。山のふもとに廃校があつてさ。そこの校庭の……」

「行かない」

私は拗ねた声音で彼の言葉を遮った。床に広げた本に目を落として、続きを読み始める。それ

は彼の顔をもう見たくなかったというだけで、だから文章の意味は頭に入って来なかった。

「私は不思議の国に行きたいんだもん。何処か他の場所になって、行きたくない」

私が偏屈に塞ぎ込んだせいで、雰囲気が悪くなってしまった。彼はしばらく無言のまま私の隣にいたけれど、やがて図書館を出て行ってしまった。

私がどんなに駄々をこねても、それは意味のないことだ。だって、花園の鍵を持っているのは彼なんだから。私がどんなにへそを曲げても、彼の氣が乗らなければあの遊園地には入れない。連れてってよ。

意地悪。意地悪。

イジワル。

本を読む気分ではなくなってしまって、私は帰ることにした。クリスティの「オリエント急行殺人事件」を、元あった書棚に静かに戻す。その本の犯人を、私は知らない。なんとなくケチが付いたような気分になったので、それきりその本を開くことはなかったからだ。

あの頃はこうして、あんなにもすぐに他人と仲直りすることができたんだろう。一度嫌った相手を許すことが、今はとても難しい。

彼と私は、翌日にはもう笑い合っていた。何事もなかったかのように。それでも、彼が不思議の国へと誘ってくれることはなかった。私がどんなにしつこく提案しても、彼の氣は変わらなかった。

その埋め合わせだったのかは判らないけれど、彼が私の話し相手になってくれる機会は、以前よりずっと増えた。気まぐれに私を置いて外に飛び出して行くこともなくなり、私たちは日がな一日図書館にいて、たくさんの事柄について話し合った。

彼は本を読むようになった。

それは間違いなく私の影響だった。彼は私の薦めるままに本を読み、これは面白かったあの、ちっとも面白くなかっただのと言っては笑っていた。「若草物語」を疎んじて「怪傑ゾロ」を称賛するところが、男の子らしいと思った。そんな中で私と彼が全会一致で褒め倒したのが、「メニム一家の物語」だった。

「確かにアップルビーの赤い髪はいいと思うけどさ」

「けど？」

「お前の髪の色も、俺はきれいだと思うよ」

あの箱庭の町で、私は少しだけ、自分の髪を好きになった。

小学校の夏休みは、たったの四十二日間しかない。けれど、その只中にいる間は、まるでその日々がずっと続くみたいに思えていた。

永遠に続くと思っていた日曜日の連鎖にも、必ず終わりがある。

少年に髪を褒められたその日、私は浮ついた足取りで帰宅した。当時私の家族が住んでいたのは一軒家のアパートの二階部分で、家の外に備え付けられた階段を昇ると玄関があった。カンカ

ンと階段を打ち鳴らしながら駆け上ると、美味しそうなシチューの匂いが漂って来る。生クリームとチーズをたっぷり使った、私の大好きな母のシチュー。その匂いに、私のうきうきした気分はさらに加速した。

夕飯を食べながら色んな事を報告しよう。

私ね、この髪を初めて褒められたよ。そう言いながら、シチューをめいっぱい頬張るんだ。そんな予定を立てながら、私は玄関のドアを開けた。

「おかえり」

聞こえて来たのは、意外にも父の声だった。その日はやけに帰宅が早かった。一緒に食卓を囲める時間に父が家にいることは、ほとんどないことなのに。

そんな父の次の言葉が、私の高揚した気分を一瞬にして灰色にくすませた。

「次の引っ越しが決まったよ」

*

もう一度、ひと目だけでも。

中に入れなくても構わない。フェンスの向こうを眺めるだけでもいい。

そんな思いで、私は山道を歩いていた。傍らに少年はおらず、ひとりきりだった。

少年に対する私の再三に渡るおねだりは、にべもなく突き返され続けた。どうして彼は、不思議の国を頑なに拒むようになってしまったんだろう。あんなにお気に入りだったくせに。

私ね、もうすぐこの町からいなくなるんだ。だから……。

それを言い出さなかったのは、なんとなく卑怯な気がしたからだった。私という存在の消失をダシに使うことは、彼の優しさに付け込むことになる。

それに、私は伝えることを恐れていた。私が彼の前から去ることを言い出せずにいた。当たり前のように続くはずだった日曜日の連鎖は、もうお仕舞い。そんな未来を突き付けたとき、彼はどんな顔をするだろう。もうあの笑顔が、永久に失われてしまうかもしれない。それが怖かった。足が痛み出した頃、彼の教えてくれた水場で、私は少しでも身体を休めた。

ただの水がどれだけ美味しいものか、教えてくれたのは彼だった。真夏の森の中が寒いくらいに涼しいことも。そこは多くの植物の吐息や、動物の身じろぎの音で満ちていることも。足を痛めて歩いた先には、読書と同じくらい素敵な場所が待っていることも。

そんな彼の「ダメだ」という言葉を裏切っていることが、少しでも心苦しい。

でも、今日が最後のチャンスなんだ。明日になったら、私は自分の部屋の荷作りに追われて、明後日には学校の先生や近所の人への挨拶回りに連れ出されて。そしてその翌日には、もう私はこの町にいない。

だから、ごめんね。

後ろめたさを振り切るみたいに勢いを付けて立ち上がり、私は森の奥へとさらに分け入った。

不思議の国が近づくにつれて、視界の端に違和感がちらついた。森を抜けた先の様子が、以前と違っている。そのことが、遠目にもおぼろげながら判った。

何だろう。視界を塗りつぶす緑の中に混じる、あの真っ白な違和感は。

私の心臓は早鐘を打った。

焦燥と嫌な予感とが、縋い交ぜになって胸を締め付ける。足の痛みも忘れて、私は走った。さがさと乱暴に植物をかき分けて、遊園地への道をひたすらに辿る。

道の先を早く見たいという急いた気持ちと、見たくないという恐れ。相反したふたつの感情が、私の中でひしめき合う。そんな葛藤をよそに、足はひとりでに前へと進んで行く。

そして、とうとう遊園地への道行きは終わった。私は息を切らしながら、ただ呆然と立ち尽くした。

そこに不思議の国はなかった。

代わりにあったのは、世界を寸断する白い壁だった。

金属製の白い壁。

それが、私の目の前にそそり立っている。壁は巨大で、私が見上げても、森の天井の上まで伸びたその上辺は見えなかった。

ビルの解体作業の現場で、よく似た壁を見たことがあった。その壁は縦長の巨大な板を隙間なく並べたような形状で、遠くから見れば伸び切ったアコーディオンカーテンに見えるに違いない。

私はその壁をぼかんと見上げたまま、微動だにせずに佇んでいた。此処には不思議の国があったはずなのに。秘密の花園への入り口があったはずなのに。

「……何、これ……？」

のろのろと壁に歩み寄る。緩慢に腕を持ち上げて、恐る恐るそれに触れた。壁はぞっとするほどに冷たく、私の指の先から熱を奪った。

何処に行ったの？

私の不思議の国は何処に行ったの？

この白い壁の向こうにあるのだろうか。だとしたら、この壁は一体何だろうか。どうして私から、不思議の国を覆い隠しているんだろう。意地悪な壁。入り口は何処だろうか。ずっと壁伝いに歩けば、そのうち入り口にぶつかるとは思えない。でも、そこから中を覗き込んだときに、不思議の国はまだそこにあるだろうか。もし跡形もなく更地になっていたとしたら、私は、私は……。

「だからダメだって言ったろ？」

混乱と動揺で今にも泣き出しそうになったとき、不意に背後から聞き慣れた声が響いた。

振り向くと、彼が立っていた。

怒ったような硬い表情。けれど声音は控え目で、目線は私から外されていた。

彼の姿を見るなり、現実感と安堵とか一気に押し寄せた。私は大きく目を見開いたまま、ぼろぼろと涙を流した。

「お、おい……泣くなよ……」

「ごめん……。でも、でも……」

巨大な喪失感が、私の胸に込み上げた。身体を中心にぼっかりと、大きな穴が空いてしまった。

「なくなっちゃった……」

私は縋るように、彼にゆっくりと歩み寄った。涙で濡れた目線を、彼の焼けた肌に落とした。
「どうしよう。なくなっちゃった。なくなっちゃったよ……」

唇が小刻みに震えて、うまく言葉を紡ぐことができない。それでも、胸の内を吐き出さずには
いられなかった。そうしなければ身体が張り裂けて、細切れになってしまいそうだった。

「すぐ、好きだったのに……。すぐ大事な場所だったのに……。もうなくなっちゃった……」
べそべそと泣く私を、彼が必要以上に慰めることはなかった。彼は女の子の慰め方なんて知ら
ない、ただの少年だった。私の正面に数歩だけ歩み寄って、彼は静かに首を振る。

「なくなっていないだろ」

「だって……でも……」

「なくなっていないだろ！」

彼は語気を強めて、怒鳴るようにそう言った。

その声に私は顔を強張らせ、彼を見上げる。涙に濡れた私の視線が、彼の視線と絡み合った。

「なくなってるんじゃない。俺はまだ覚えてる。お前はそうじゃないのか？ もう忘れちゃったの
かよ？」

吐き捨てるように彼は言った。

「俺は全部覚えてる。白い馬のメリーゴーラウンド」

彼は真摯な視線で、私の薄茶色の瞳を見つめていた。まるで私の目の中に、あの遊園地が残っ

ているとも言いたげに。

「ジェットコースター。見てると、乗りたくなって来る」

「わ、私だって！」

私は声を張り上げた。

「私だって覚えてる！　小さな観覧車。こじんまりしてて、すごくカラフル。赤と、黄色と、青と桃色と、緑！」

彼は真剣な表情で、一度だけ大きく頷いた。それから続けた。

「足を埋め尽くすタイル。ちょっと汚れてる」

「動物のふれあい広場。でも、動物なんて一匹もない」

「振り子みたいなゴンドラ」

「ソフトクリーム屋さん。美味しそうな看板がそのまま」

「空中ブランコ。風の強い日は、たまに揺れてる」

「ガラス越しに見える、暗いゲームコーナー」

「お金を入れても動かないゴーカート」

「お化け屋敷。やっぱりシャッターが閉まっている」

彼との遣り取りの中で、私の頭にあの遊園地がありありと思い浮かんだ。寂れていて、廃れていて、でも夢のようなあの不思議の国。それが、手を伸ばせば届きそうなくらいにありありと。なくなっただけなんかない。あの遊園地は、今でもまだ存在する。

「なくなったりしない。俺とお前が、ちゃんと覚えてる。だから不思議の国はなくならない」
そう言いながら、少年は私の頭に手を乗せた。彼がきれいだと言ってくれた髪の毛が、くしゃりと乱れた。

「あの遊園地は、ずっと此処にあるんだ。だから泣かなくてもいいんだ。ずっと、ずっとずっとあるんだから」

彼の言葉はきくと、半分は自分自身に向けた言葉だったに違いない。

彼はずっと前から知っていたのだ。この白い壁の存在を。もう不思議の国に歩いて行くことが出来なくなってしまうことを。秘密の共有者である私にすら知らせずに、彼はひとりでその事実を抱え込んでいた。

どんなに切なくて、苦しかっただろう。

どんな気持ちで私に「ダメだ」と言い続けたんだろう。どんな気持ちで「もう飽きたんだ」と言い繕っていたんだろう。想像できる気もするけれど、きつとどんな想像よりも重たい気持ちだったはずだ。

だから、私の頬を伝ったひとしずくの涙に、不思議の国の消失を憂う意味はもうなかった。その涙は、彼の底抜けの優しさへの手向けだった。

「私、遠くに行くんだ」

白い壁の下で無言のまま佇んでいた私たちは、どちらからともなく帰り道を歩き始めていた。

「ずっと遠くの町に行くの。名前も知らない町」

その帰り道で、私はずっと言い出せなかったことを口にした。

本当は言いたくなかった。何も言わずにこのまま、彼の前から消えてしまいたかった。でもそれは、ただのつまらない保身のための感情だと判っていたから。

「だから、もう会えない」

彼は獣道の上で立ち止まって、私を振り返った。その顔に表情はなく、目は虚ろだった。私は不意に、身体が半透明に透き通ってしまったような錯覚に陥った。彼の視線は私を通り過ぎて、ただ夕暮れの森の背景を見ていた。

「……そっか。やっぱり消えちまうんだな」

彼は「色のない」私の全身を見つめた。色の淡い、存在感に乏しい私を。その視線は、もう明日には消えてなくなってしまう女の子を見る目だった。ひと夏の間に見た陽炎のように、私は彼の前から消え失せる。彼の予感通りに、跡形もなく。

……嫌。

嫌だ。

私は消えたくない。私は淡い幻なんかじゃない。私は確かに此処にいる。キミが教えてくれた色んな事が、この胸の中に詰まっている。だから、そんな顔しないで。

「私は消えないでしょ？」

私は祈るように問い掛けた。

彼はきょとんと首を傾げた。私を見つめる虚ろな瞳に、少しだけ光が宿った。薄暗い森の夕暮れに滲む私に、しっかりと焦点を合わせて。

「不思議の国と同じでしょ？」

ねえ、そうだと言って。

せめてキミだけは、私を世界から切り取らないと。

そう言って。

「……そうだな」

少年は照れくさそうに頬を搔いて、それから笑った。いつものような、はにかんだ表情。

「俺はお前を忘れない。絶対に」

ああ。

なんてくだらないことで悩んでいたんだろう。

この笑顔が消えてしまうことを怖がるだなんて、ちっとも必要のない悩みだったんだ。だってほら。私の大好きなその笑顔は、こんなにも確かに、此処にあるんだから。

私たちは森を抜け、田圃の畦道を歩いた。

感傷的な最後の会話も、湿っぽいお別れの挨拶もなかった。いつものように他愛もない会話ばかりが繰り返され、私たちは無邪気に笑い合った。

ふたりの帰り道の分岐路で、立ち止まって少しだけまた話して。そして彼は、最後まで普段通

りだった。

「じゃあな」

彼は小さく右手を上げて、私に背を向けて歩き出す。

お別れはあっさりしているほうが好きだ。そのほうが、なんでもないような別離だと思えるから。また明日にでも、すぐに会えるような気がするから。

秋の気配が混じり始めた風の中で、麦わら帽子を押さえながら彼を見送った。沈みかけた夕陽が、その背中を黒く滲ませていた。降って来るヒグラシの鳴き声と、むせ返るほどの草の香り。その瞬間の世界はあまりに濃密で、幼い私はその場から動けずにいた。だんだんと小さく縮んで行く彼の背中が、道の向こうに消えてしまうまで。

*

今はもう無くなってしまった遊園地が、私に何かをもたらした——だなんて、美談じみた文句でまとめるつもりはない。あの遊園地は私にとって大切な思い出で、ただそれだけだ。

思い出はきつと額に入れて飾るものではなくて、そっと記憶の引き出しに仕舞い込んでおくもの。お洒落なりボンの装飾も、後付けの書き込みも要らない。分類するためならば、付箋のひとつで事足りる。

私に出来ることは、ただ美化しないように努めることだ。

思い出はいつだって優しい。時を経るごとに情報は削ぎ落とされて、忘却が思い出を加工して

行く。後に残り続けるのは、甘美な場面ばかり。

そんなのは嫌だ。

少年の零れるような笑顔と、気だるげな夏の午後と、不思議の国での夢のような戯れ。それらと同じくらいに、彼の不躰な物言いも、あの白い壁の冷たさも、ずっと覚えておきたいのに。

箱庭の町を去った後も、私の読書フリークは続いた。何も変わらない。何も。

ただ少しだけ、私は考えを改めた。

本当の不思議の国は、きっと本の中ではなくて、外の世界にあるんだろう。そして入り口であるウサギの穴は、誰かによってもたらされるのだ。花園の鍵を持つ誰かによって。

だから私は本の虫を少しだけ控えて、人と話すようになった。引きこもり性は相変わらずだったけれど、でもほんの少しだけ、外でも遊ぶようになった。

あの日以来、少年には会っていない。

手紙を遣り取りすることもなかったし、連絡先を教え合うこともなかった。少年は私の記憶の底の箱庭で、永遠に少年としてあり続ける。

セミの声が響く夏の夕暮れに、ふとあの遊園地を思い出すことがある。少年のはにかんだような笑顔と一緒に。焼けたように橙が滲む夏空を、彼が同じように見上げ、あの頃を懐かしむことがあるだろうか。

祈りのように私の胸に湧くひとつの感情がある。この空を見上げるキミの表情は、あの頃と同

じようにあって欲しい。それが私と不思議の国とを繋げる、とても大切な鍵なんだ。
だから。
ねえ、どうか笑っていて。

（大学院薬学教育部分子機能薬学専攻二年）

銀色のライター

吉川 真悟

蓮を殺すと決めてから、もう二週間が経過している。さすがに迷い過ぎだ。一度決めたことなのに、いざとなってみると、なんとも言い難い焦りのようなもので身動きが取れなくなった。別に僕は高所恐怖症ではないけれど、もしそういう人が無理やり東京タワーに上らされたりしたらこんな気分になるのかもしれない。

僕は取り返しのつかないことをしようとしているんじゃないだろうか？

そりゃそうだ。取り返しなんてそうそうつくものではない。むしろ取り返しのつかないことのほうが圧倒的に多いこの世の中なのだから。僕の決定した結果、何が起きるかには誰にも正確に予想することなどできない。ただはっきりしているのは、僕が蓮を殺せば、蓮は死ぬ、それだけだ。そしてもしかすると、蓮の死は僕の想像をはるかに上回る数の人々に影響を与えるかもしれない。僕は乱暴に席を立て、キッチンへと行ってコーヒーを淹れた。これで今日十二杯目だ。別にコーヒーは好きではないけれど、飲んでいると落ち着いてくる気がした。

一息に飲み干して、散らかし放題の仕事部屋を片付け始める。目の前に突きつけられた課題か

ら目をそらしたいときに、人は部屋の掃除をよくする、という自覚がありながら、僕は逃げる。そういえば学生時代もテスト前とか、勉強しなくちゃいけない時間に限って部屋の掃除をしていたなあ。僕は何も成長しちゃいない。

無駄に大きな姿鏡の中に写る僕の目は、疲れをたっぷりためて淀んでいた。まるで人殺しの目だ。僕は力なく苦笑する。特に何かを一生懸命がんばっていて疲れたわけじゃない。ただ、なんとなく疲れている。頭はそれなりに使ったし、睡眠も不足しているのだけれど、ここまで顔がやつれる原因はそんな簡単に説明できるものではないだろう。

要するに、蓮を、どうするか。決まりきっていることについて悩むのは、僕の短所だ。答えは出ているのに、逃げ道を必死になって探している。

「……ふう」

さすがにもう、限界だ。社会も僕の優柔不断に付き合ってくれるほど暇ではない。

僕は仕事用の机に座りなおして、一呼吸深々と吸ってから、鉛筆を走らせ始めた。

出来上がったばかりのネームを担当にファックスで送ると、すぐに電話がかかってきた。

「蓮が死んでんじゃないですか」担当の声は別に蓮が死んだ事実に批判的というわけではなく、単に現実がうまく飲み込めていないようだった。

彼は僕よりも六つも年上の三十四歳だが、僕に話すときは必ず敬語だ。仕事の上での付き合いであることを忘れないようにするためらしい。

「はい、死なせてみました」

僕も、ただ事実を述べるように淡々とそう言った。気を抜いたら感情的になってしまいそうだった。

「死なせてみたじゃないでしょう。死なせていいわけじゃないですか」担当の声は明らかに苛立っていた。「大丈夫なわけじゃないじゃないですか」

「大丈夫って、何がですか」

「なにもかもですよ。これからのことがですよ」まるでいい年した大人に足し算でも手取り足取り教えるように、面倒臭そうに言う。「蓮が死んじゃって、〈摩天楼〉が成立すんのかっていう話ですよ」。

〈摩天楼〉とは、僕が月間少年誌で連載している漫画の略称だ。

「成立しますよ。するに決まってんじゃないですか、そもそも蓮は脇役なんですから。鉄平が死んで騒ぐならまだしも、蓮が死んだって〈摩天楼〉が〈摩天楼〉であることに変わりはないですよ」

「……ワタナベさんだって分かっているでしょう？ 〈摩天楼〉の人氣は蓮があつてのもんだってことぐらい。そりゃ、ワタナベさんの中では〈摩天楼〉は蓮抜きでも成立するかもしれませんが、読者は絶対に許してくれませんよ」

「許すってなんですか。僕がどうして読者に許してもらわなくちゃいけないんですか。自分の漫画の中で登場人物を一人殺しただけのことじゃないですか。そんなの今までだって何回もやって

きたことですよ」

「蓮は特別です」担当の声はとうとう凍えるほど冷たくなっていた。彼の中では、僕はもうすでに一人の漫画家ではなく、物分りの悪い馬鹿な子供に成り下がってしまっているのだろう。仕方がない。今まで散々好き勝手やってきたのだから。彼が僕に意見を出したり、ストーリーに自分のアイデアを盛り込もうとしたりするたびに、僕は駄々っ子のように反発した。もちろん明らかに斬新で素晴らしいアイデアを彼が出してくることもあったし、そういうものはいくらか盛り込まれていった。辛抱強く僕の描いたものに対して意見を出し続ける彼を、僕はいくらか尊敬もしていた。能力のある人なのだ。だから僕は反発したくなるのかもしれない。

「分かっているでしょう？」担当はまた言う。

ワタナベさんだって分かっているでしょう？

ああ、分かっている。しかし、分かっているからこそ認めたくないこともある。認めてしまったら僕の負け。

「とにかく、もう一度これ考え直してくださいよ。こんなの受け取れませんよ」

受話器の向こう側から、パラパラと紙をめくる音がした。「それとも、実は蓮は死んでなくて、あとからまた物語に復帰したりするんですか」

「しませんよ。僕がそういうの嫌いな、知ってるでしょう」

何でもいいからさっさと描き直してくださいよ、と何度も何度も繰り返して、電話は切れた。

僕に届くファンレターのおよそ八割が、蓮に関するものだ。大半は蓮というキャラクターについて褒めちぎったものであり、たまに蓮本人に当てたラブレターが混じっていたりもする。もちろん女性からのものがほとんどで、これは果たして僕が読んでもかまわないのだろうか、と思わずためらってしまうようなほどのものもある。おそらく彼女たちは現実の自分の彼氏にさえ、あんな形での愛情表現はしないのではないだろうか、と思えるほどの、蓮への甘ったるい恋心が便箋何枚分も表現されて、僕のもとへと運ばれてくる。そしてそのたびに、僕は複雑な気分にはせられてしまう。蓮は僕の生み出した架空の人物であり、ということばかり、僕の一部といっても過言ではないはずなのに、どうして〈蓮〉と漫画家〈ワタナベワタリ〉の間には、こんなにも壮大な隔たりがあるのだろうか。

〈摩天楼〉という異能力者同士の痛快アクション娯楽マンガにはふさわしくないほど、蓮というキャラクターはよくできた人間だと、描いていて自分自身でもよく思った。トレードマークの銀色のライターを武器に、炎を操って敵を倒していく蓮は、クールでありながらどこか温かい一面も持っている。一応〈摩天楼〉は、巻数二十七巻にしてシリーズ累計七千万部を売り上げる大ヒット作なのだけれど、蓮の登場する七巻以降の売り上げが、なぜか鉄平とヒロインのつかさの二人しか特に活躍しない六巻までを大きく引き離しているらしい。コミック本を七巻から集め始めた人がたくさんいるようだった。僕にはさっぱりその意味が分からない。

キャラクター人気投票も、いつもぶっちぎりの一位だ。いや、実は読者だってスタッフサイドだって、悲しいことに僕自身も、蓮が一位を取ることも、他のキャラクターに対してほとんどの

読者が特別な感情を抱いていないことも知っていたので、キャラクター人気投票とは、いったしまえば一種の〈蓮感謝祭〉みたいなものだった。

〈摩天楼〉は三年前からアニメも放送している。その際、蓮の声を勤めた若手の男性声優さんは、その容姿の格好よさもあいまって、一躍人気者となり、多くの女性ファンから〈リアル蓮様〉と呼ばれる始末だった。

だから本当は気づいているのだ。僕は蓮のおかげでいい思いをしている。食べ物に困らないのも、こんなにいいマンションに住んでいるのも、〈ワタナベワタリ〉という名前が有名になったのも、なによりこうして小学生のころからの夢だった漫画家という職業を続けていられるのも、すべては蓮のおかげだ。蓮が登場するまでの〈摩天楼〉の状態も、その人気も、今には遠く及ばないのだから。そして僕は、そのことに苛立っている。この世間の蓮ブームを、一番冷ややかな目で傍観しているのは、ほかでもない作者である僕自身なんだろう。蓮というキャラクターが嫌いなわけでは決していない。むしろこいつを思いついたとき、僕はあまりの興奮に連載が決定したときよりも盛大に自分をお祝いたくらい、愛着のあるキャラクターだ。しかし、僕が自分の成功について蓮に〈感謝〉してしまったら、僕の漫画家としての、一人の作家としての核みたいな、心臓みたいなものが、音を立てて粉々に崩れてしまうような気がした。

「キャラがお前を離れて一人歩きしだしたら、気いつける」とは、僕の漫画の師がよく言っていた言葉だ。「お前の作り出した連中が、お前の思い通りに動かなくなっちゃったら、それはマズい。お前の漫画家生命にかかわる」

僕はこの言葉の意味を勘違いしていた。僕はてっきり、漫画を描き続けることができなくなってしまうものだと思っていたのだ。しかし、そうではなかった。僕の中で〈漫画家生命〉とでも呼ぶべき、僕とは別の何かしらの生命体が死ぬのだ。はっきりと自分の中で感じ取れる。命の灯火は、今にも消えてなくなってしまうようなほど弱まっている。

幸い、蓮は本誌登場当初から僕の中でそれなりに活躍することが決まっていたため、読者の二ーヅに应运えて蓮を活躍させるなんていう無様なことをしなくて済んだ。だから今回も、読者の二ーヅにあわせて蓮を生きながらえさせるなんてことはしたくない。

仕事机の前で頼杖をつきながら考えに耽っていた。自分で作った問題の解き方が自分で分からなくなってしまったような、妙な感じだった。

僕は蓮の死に様をいささか前よりも壮大でドラマチックで格好いいものにして、修正後のネームを担当にファックスした。

「どうなっても知りませんよ？」担当の声は嘆きに近い。

下書きを済ませ、いよいよペン入れをするというときに初めて、いつもお世話になっているアシスタントのみんなを呼んだ。一読者として漫画を楽しみたいとか何とかで、僕がアシスタントとしての仕事を頼むまで彼らはいつも話しの筋を聞こうとしないのだ。まだ弱冠二十七歳の僕にはもったいないほどの尊敬の念を持って働いてくれる彼らは、貴重な存在だと思う。

いつもの調子で仕事場に入ってきて、すでに広げてある下書きの原稿を眺めだした。

「え、あれ」最初に声をあげたのは、小松くんだった。「先生、これ」

「どしたの？」カオルちゃんが身を乗り出して、小松くんの手元を覗き込んだ。無口な佐久間くんもそちらにちらりと目をやる。「え、うそ」

「蓮が死んでますよ、これ」小松くんが、まるでミスを指摘するかのようなトーンで言った。

僕は何も言えないでいる。何をどう説明すればいいか分からない。どうすれば彼らに納得してもらえるかまったく思いつかない。蓮の死が、彼らに大きな衝撃を与えるであろうことは最初からわかっていた。それは、僕がいくら自分の中で蓮の特別性を否定していたとしても、仕方のないことだ。

「うん」僕は搾り出すように、やっとそれだけ答えた。

「いいんですか」カオルちゃんの声にも非難の色はない。この間の担当といっしょで、何が起きているのかさっぱり分かっていない様子だった。

「うん」僕はもう一度うなづく。

仕事部屋は、まるで病院の待合室のようにしんと静まり返った。三人は僕からの詳しい説明を待っているようだったけれど、僕の頭の中はまるで中学生のようにごちゃごちゃとした言葉で溢れて、ちっとも説得力のある文章が組み立てられなかった。

三人には、恩があるから。感謝すべき理由があるから。と言っても、いつも原稿を手伝ってもらっているだけのだけだ。つまり結局、僕は単にこの三人が好きなのだろう。彼らが、世間一般の読者と同じように、蓮というキャラクターのことが好きなのは知っていた。蓮を殺すのを

ためらった理由のひとつに、彼らの存在があった。彼らをはっきりさせたくなかった。

顔の见えない、その他大勢の読者のことなんて、僕はどうとも忘れられる。だけど彼らは目に見える読者だ。担当のように口を出すことのできない、完全に受身の最初の読み手だ。そしていつも、僕の前稿を褒めてくれる。お世辞ではなく、あらゆる部分に指差して気づいてくれる。

僕はそのときに、自分のしていることが報われているような気がするのだ。

カオルちゃんは穴があくほど、下書きの中でたくさん血を流し目を閉じている蓮を見つめていた。まるで念力を送って紙の中のその死体を復活させようともしているかのようだった。

しかし、「いいんですか」と沈黙を破って声を発したのは、意外なことに無口な佐久間くんだった。今度は僕が、一瞬何が起きたか分からず、固まってしまう。

「先生、蓮が好きだったじゃないですか。そりゃみんな好きですけど、先生は違ったでしょ？　そういう好きとは違ったでしょ？」佐久間くんがこんなにしゃべるのを初めて見た。「いいんですか、苦しくないんですか。俺はまだ……失礼ですけど、信じられないです。蓮が死んだってことより、先生が蓮を殺したことが信じられないんです、俺は」

それだけ言って、佐久間くんはまた黙り込んでしまった。しかし、彼の中からなんだか湯気のようなものがしゅうしゅうと音を立てて出ているような気がした。もしくは中に詰まっていた空気が抜けて萎んでいくようでもある。

「愛着はもちろんあったよ。蓮が好きだったし、今までたくさんお世話になった。けど、どうしても必要なんだ。蓮が死ぬことが、この漫画にどうしても必要なんだ」

それだけ搾り出すのが僕の精一杯だった。

みんなを納得させられるだけの理由を、説明する自信がなかったからだ。

物語の進行上大事なことである、というのには確かなのかもしれない。今僕が描いているストーリーの進行上、変な表現だけれど蓮の死はのちのち生きてくる伏線だ。

しかし、蓮の死は避けられなかったのかと問い詰められれば、僕は答えに詰まる。万人を納得させる理由なんて思いつかない。僕自身さえも納得させることができていないのだから。

「……そう言われちゃったら、もう俺は何も言えないですね。俺だって蓮とこの漫画と、どっち取るかって言われたら、そりゃ〈摩天楼〉を取りますからね。……変なこと言ってますみませんでした」

仕事場は冷え冷えとしていた。いつもは談笑の耐えない愉快な仕事場が、病院の待合室を通り越してお通夜のようなだった。

そうか、これは、蓮の通夜なのかもしれない。身内だけでひっそりと開かれた、彼のための通夜だ。

小松くんは原稿に集中することで気を紛らそうとしていたし、佐久間くんはあれだけしゃべったっきりいつもの無口な彼に戻っていた。

カオルちゃんは泣いていた。声こそ上げなかったものの、目にあふれた涙が次から次へと頬を伝っていた。

「原稿を濡らさないようにしてくれよ」僕がおどけて言くと、カオルちゃんはうっすらと微笑ん

だ。

「気をつけます」

蓮の最後のシーンのページは、すべて僕がペンを入れた。べた塗りも、背景にわたるすべての描き込みも、僕一人で手をかけた。横たわる蓮の亡骸の下に、銀色のライターをそっと添える。

三人は何も言わずにそれを眺めていた。

蓮の死に対する反応は、僕の想像を絶する早さだった。連載されている月刊誌の発売日翌日には、とんでもない量の〈読者からのお便り〉が届いた。ダンボールで六箱分。とりあえず僕の家を送られてきたものだ。危険物がないかどうかのチェックだけして、中身はまだ未開封らしい。

これ以上届いてももう今日は持ってこないように、会社のほうに頼んでおいた。僕は昼過ぎには家に持って来てもらったダンボールを、夜までずっと放置していた。それはちょうど、親に成績表を見せるのを後回しにする感覚に似ていた。やはり僕は自覚しながらもそこから抜け出そうとしない意気地なしかった。

アシスタントの三人は、一緒に開封したいと申し出てきたけれど、僕はそれを断った。届いた手紙の内容が、あまり喜ばしくないことは予想できたから、彼らはそう申し出たのだろうけれど、僕はどんな批判も自分ひとりで受け止める覚悟は決めていた。

僕はガムテープで固く閉ざされたダンボールを、カッターナイフで丁寧に開けた。

中から、ぎゅうぎゅうに乱雑に詰め込まれた大量の封筒やはがきが見出てきた。

「……………」今までだって、大量の手紙が届くことは何度もあった。その中のほとんどが蓮に対するファンレターだったものの、批判的なものも少なからずあった。

しかし今回は……。

今まで感じたことのない緊張感を感じる。覚悟を決めるってなんなのだろう。覚悟はさっききちんと決めた。それなのに、手紙を開ける踏ん切りがつかない。なんのために覚悟を決めたのだ。何のために二十杯近くもコーヒーを飲んだのだ。おいしくもないコーヒーを。

僕は歯を食いしばる。

一つ目の封筒を取って、封を開けた。

中から、無機質な薄い灰色をした便箋が出てきた。

『びっくりしました。いつも摩天楼の物語にはいろいろ驚かされてきましたが、こんな驚きはありません。こんな驚きは望んでませんでした。信じられない。十回以上も読み返してしまっただけ。飲み込めない。蓮は死なないと思ってたし、ワタナベ先生は今まで主要なキャラは死なせてなかったから、そんなの起こるはずがないと思ってた。それなのに、なんですかこれ。返して。わたしに、わたしたちに蓮を返してください。摩天楼に蓮を返してください。もう、摩天楼を読む気がしない。鉄平やつかさかどれだけ頑張ったって、それを描いてるのが蓮を殺した人だと思ったらもう、応援できません。さよなら。蓮、いままでありがとう』

蓮を殺した人。僕は蓮を殺した人なのか？ 蓮を殺したのは敵の銃弾ではないのか。

吐瀉物の様に沸きあがる憤りを、もうぬるくなってしまったコーヒード流し込む。ひどい味がする。僕は別の封筒に手を伸ばす。

『信じられん。あんたにとって蓮はやっぱりマンガ動かす駒に過ぎなかったってことかよ。なんだこれ。なんで蓮が死ななきゃいけなかったんだよ。意味わかんねえし。蓮殺す必要あった？ なんて死んじゃったの？ あんた快楽殺人者かよ。意味もなく人殺しちゃったりしてさ。蓮返せよ。俺たちに蓮返せよ。マジむかつく。なんのためにあんな高え雑誌買ってると思ってるんだよ。蓮に会うためだろうが！』

こちらとしても信じられない話だが、これは女性からの投書だった。どうして男言葉なのだろう。怒りの表れだろうか。

『蓮の能力は大体半径三百メートル以内の気配なら察知して反撃できたはずである。森坂教授の銃弾がいくら蓮の血を吸ってたとしても、蓮は第三から第五まで秘孔あけてればたいいの物理攻撃は自分に届く前に弾き落とせるはず。現に十八巻ではあれだけの乱打戦になっておきながら無傷で生還するっていうむちゃくちゃぶりを発揮している。そもそもその前にリー伯爵はどう考えたってあそこをばさつと突っ立ってたのはおかしい。なんで蓮を守るのが自分の役目だとか言っときながら、自分は秘孔を四つまでしかあけねえんだよ。』

今挙げられた問題は、全て僕の中ではきちんと理屈の通った、解決済みのものだ。今度作中で説明する必要があるそうだった。こういう批判ならば何の問題もない。僕は理屈で言い負かされることはない。怖いのは屁理屈なのだ。

三つ目の封筒を手取る。

『人殺し。蓮を返せ』

それだけ書かれていた。

人殺し？

さっきから頻繁に出てくる言葉だ。人殺し、人殺し。僕は確かに物語の中で蓮を殺した。しかし、それは人殺しなのか？ 蓮は〈人〉なのか？ 平面の中でしか生きることのできない彼を、読者は一人の人間として愛していたのか。

やはり、僕は計り間違えていた。蓮は僕が想像していた以上に、世の中に影響を与えていたのだ。それこそ、〈次元〉を超えた勘違いだった。蓮は彼らにとって二次元の世界の住人ではないのだ。彼らにとって、蓮は生身の人間なのだ。例えばテレビに出るロック歌手やアイドルのように、確かな体温を持ち合わせたりアルなのだ。〈思い入れのあるキャラクター〉なんてレベルの話ではないのだ。

だから僕は、人殺しか。彼らから崇拜すべき偶像を奪い取ってしまったから。

しかし僕は、罪悪感など抱いてはならない。僕は悪いことをしてなどいないのだから。蓮に同情してはならない。

それは、師の教えだ。僕の生み出したキャラクターに、僕が振り回されてはならないのだ。蓮は好きだ。しかし、割り切らなくてはならないところは割り切ることができる。

『あれほど世間で大きな存在になっていった蓮を物語の中で死なせるという決断に踏み切ったこ

とに大変感銘を受けました。正直言ってまったく予想もつかない展開でした。多くの読者を、悪い意味で裏切ったことになると思います。当然たくさん批判も来るでしょう。しかし、少なくともわたしは、ワタナベ先生の勇断を称えたいと思いますし、そう思っている人たちはわたしだけではありません。どんな批判を受けても、摩天楼を描き続けてください。応援しています。』

そして、なぜか写真が同封されていた。二十代後半ほどの、エプロンをかけた差出人と、彼女の娘と思われる小さな女の子が移っていた。なんとなく、旦那さんが写っていないことが気になった。

ありがたい手紙だとは思う。こちらの意図を理解してくれている人が、少なくともこの世に存在していることだけでも確認できれば、いくら救われる。しかし、この社会が多数決で成り立っていることを考えれば、おそらく少数派であろう〈肯定派〉のみなさんの助力は、僕を慰める程度の影響力しか持たないのには目に見えていた。世の中には、大衆というものの自分をひどく嫌い、一般大衆の下す評価とは別の評価を何とかひねり出そうとする人々がいる。

五つ目の封筒を手取る。

『蓮へ』

「……………」僕は手が、そして視線が止まる。固まる。蓮へ。これは僕宛じゃない。蓮宛の手紙だ。今までだって何枚も見えてきた、蓮宛の手紙だ。こういう手紙の最後には、決まって最後に『これからがんばってね』という一文が添えられていた。そして彼女たちの期待通り——別に

要望に応えたわけではなく、結果的に、だけれど——蓮はほんぶん活躍した。

『あなたの突然の死に、とても戸惑っています。毎回あなたの元気な顔を見るために雑誌を買っていました。わたしはあなたのことが大好きだったのに。どうして死んじゃったの？ わたしはまだこの事実を受け入れることができません。来月また確認したらあなたが生き返っているんじゃないかと、心のどこかで期待しています。』

蓮をリアルと捉えているのか二次元の産物と捉えているのかよく分からない文面だ。自分でも訳が分からなくなっているのかもしれない。

『今までたくさん助けてもらいました。これからあなたなしで生きていかなくはならないと思うと心細くて仕方ありません。あなたの一言一言が、わたしの憂鬱を吹き飛ばしてくれました。あなたの』

「……………」

『あなたの命を奪ったワタナベワタリさんの判断が正しかったとは思えません。わたしたちは、あなたがいなくなっても、やっぱりあなたの味方だし、あなたの味方しかしません。ワタナベワタリさんにはそれなりの制裁が下るでしょう。わたしたちはあなたの遺志を汲み取ります。あのことは任せて。ゆっくり休んでください。』

手紙の勢いはなかなか収まらなかった。一ヶ月が経ち、連載が先へと進んでいくたびに冷めると思われたほとぼりは、蓮のいない物語が進行するにつれて燃え上がってきてしまった。最初は

事実を受け入れられず、物語の進行に一抹の希望を託していた蓮ファンの人々が、蓮のいない《摩天楼》を目の当たりにして爆発した。それも、ある程度いろいろな感情を溜め込んだ上での爆発だったので、すさまじかった。一日に三千通近い投書があり、会社から大量のはがきや封筒が送られてくる。同じ人物が何度も送ってくることもしばしばあった。蓮のトレードマークである、銀色のライターもいくつも送られてきた。自分の意見を伝えたいのではない、単なる僕への嫌がらせだ。

出版社宛に届けられたものの中には、向こうで没収されたものもいくつかあった。蓮の死の責任を編集部に求める声も多数寄せられており、事態は日に日に深刻さを増し、僕や《摩天楼》を少し離れた場所でも問題は乱発していた。

「……どうするつもりですか」

電話越しの担当の声は、鳥肌が立つほど静かだ。おそらくぜんぜん寝ていないのだろう、押し殺したからではない、元気が出ないから声が静かなのだ。

「どうって……何をです」例によって、僕はなんとなく反抗的な態度に出してしまう。

「この状態をですよ」担当は少し声を荒げる。人のアドレナリンをもっとも溢れかえらせるのはやはり怒りだ。

意図せずして大きな大きな沈黙が生まれてしまった。僕は、なんだか無性に担当に謝りたくなつた。すみません、僕が間違っていました、蓮を殺すべきじゃなかったんだ。こんなに迷惑かけるつもりじゃなかった。本当にすみません。

しかし同時に、僕の中の不格好なブライドが、それを拒む。謝っては駄目だ。謝ってしまったら、負けだ。僕は担当に、読者に、世間に、そして蓮に負けたことになる。

「この状態が、僕のせいだって言うんですか」

「違うんですか？ あなたが蓮を殺したせいでしょ。あなたがあのとき蓮を殺すのを踏みとどまって、いつものように活躍させて終わらせとけば、こんなことにはならなかったんだ。やっぱり《摩天楼》はうちの看板漫画で、あんたは売れっ子人気漫画家でいられたんだ。敵なんか作らずにね。あなたはわたしの意見をまったく聞こうとしませんが、そしてそれでもそこそ売れてましたけど、今回ばかりは自分の過失を認めざるを得ないんじゃないんですか？ 自分だって気づいてるんですよ。わたしの意見に従って、あのとき踏みとどまっとけばって。後悔してるんですよ」

「後悔？ してませんよ。あれが僕の描きたかった漫画ですよ。僕の表現したかったことだ。自分の漫画の登場人物に物語の進行も、僕の表現したいことも、邪魔はさせません。ええ、邪魔はさせませんでしたよ。後悔なんてしてるはずがない。むしろすっきりしています。僕はやりきったんだ。それについてはどう、いいじゃないですか」

「よくありませんよ。何勝手にすっきりしてるんですか。勝手に終わらないでください。《摩天楼》はあなたの漫画だけど、あなただけの漫画ではないんだ」

「僕の漫画ですよ」

「だけど、《摩天楼》は、蓮は、もうあなただけのものじゃないんですよ」

あなたは勘違いしてるんだ。と担当は言った。

「……………」

「これだけ膨大な大きさに膨れ上がったメディアを独り占めしようってほうが無理なんですよ。あなたはコントロールしてたつもりでも、蓮だって、鉄平だって、つかさだって、みんな独り歩きを始めてんだから。〈摩天楼〉は人気が出た時点であんたの手元から離れちゃってんだよ」担当はポリシーであつたはずの敬語を忘れて言い捨てる。

「……………」 僕は何も言えない。 なにも言い返す言葉が見つからない。 そんなことはない、と否定することは簡単だが、自分自身、それを心のどこかで気づいていたんじゃないか、と思えなくもなかった。

いや、担当の、言う通りなのだ。 僕は自分の部屋の雑然さをなんとなく見渡す。 受話器の向こうではまだ担当が吼えている。 溜まりに溜まっていたストレスも鬱憤も、いっしょくたにして僕にぶつけているようだった。 僕の耳はいつのまにかその担当の遠吠えをシャットダウンしていた。 そのかわり、ひどく耳鳴りがする。 雑然とした部屋が、なんだかこちらへ迫ってくるような気がした。

僕は、〈摩天楼〉を失うことが怖かったんじゃないのか？ だから蓮を殺したのではないのか？ 読者から、世間から、出版社から、そして蓮から、僕は〈摩天楼〉を取り返したかったんじゃないのか？ だから蓮を殺したことで、自分が〈摩天楼〉の作者であり、支配者であり、意のままにその動きを操ることができることを見せ付けてやりたかったんじゃないのか？

僕は、蓮に嫉妬していたんじゃないのか？

手は無意識に受話器を下ろしていた。まだ何かを叫び続けていた担当の声はむなしく千切れた。

僕は力なく歩いて、重力への抵抗を諦めたようにソファへと腰を下ろした。なんとなく見つめた自分の掌が、なんだか汚く見えた。突然自分が取り返しをつかないことをしてしまったのではないかという不安が、今更ながら押し寄せてきた。確かにそうなのだ。

僕は心のどこかで、蓮に嫉妬していた。

物語の進行上譲れないものであったのも確かだ。しかし同時に、確かな、殺意のようなものも、あったのではないか。

僕は私利のために、邪魔者を消し去っただけではないのか。そしてそれは、蓮の独立性、僕の手から離れて物語が独り歩きしていることを認めることになるのではないか。否定できるかと訊かれれば、完全にはできないと答えるしかない。

昔、僕は今でも忘れることのできない大失態をおかしたことがある。もちろん作品中でも、私生活でも、作品から少し離れた仕事のところでも、失敗は数多くある。しかし、あれほど後々になっても悩み続けたものはないし、心に消えない傷をつけたものもない。

初めて、僕宛にはなく、〈蓮宛〉に手紙が来たときだ。それまでには一度もない経験だったので、僕はどう対処すればいいのかわからず、今思えば絶対にやってはいけないことをしてしまった。蓮を演じて返事を書いてしまったのだ。

当時は蓮が連載にようやく登場したかしていないかというところで、ファンレターらしいファンレターも本当にちらほらやってくるくらいだったため、僕はすべてのファンレターに返事を書いていた。しかし、蓮へと宛てられた手紙の返事を、「ワタナベワタリ」が書いてしまったいいものかと迷い、安易にそういう決断に至ってしまったのだった。

差出人は中学一年生の女の子だった。もちろん、会ったことがあるわけでもなく、手紙にそう記されていたというだけだから、もしかしてもしかすると三十代の男性である可能性もなくはないのだけれど。

最初は少女が蓮からの返事を見て喜ぶことだけが想像できて、なかなかいい気分だった。彼女からその返事が来るまでは、の話だ。僕は愕然とした。彼女は喜びすぎたのだ。

蓮と手紙を通じて繋がることを、彼女はまるで自分も〈摩天楼〉の中の登場人物になったかのように感じたのだろう。そして、おそらく、彼女の中ではすでに、自分と蓮は〈恋人関係〉になっていたのだと思う。

明らかにその内容が、最初に貰ったものと比べて常軌を逸脱していた。我を忘れて必要以上に熱を込めてしまうことは別に誰にでもある。しかし、少女にしては美しすぎるその端正な字で綴られた内容は、不快感でも嫌悪感でもなく、僕に恐怖を覚えさせた。そういう種類の人間がいるのは知っていた。フィクションに溺れるというか、見境のつかなくなる人があるのはよく知っていた。作家や漫画家なんてそんなタイプの人間ばかりだろうと思っている人はたくさんいるけれど、我々はかなり自分の作品やいわゆるフィクション、創作物、もしくは〈二次元〉を、冷静

に見つめることのできる人間だ。僕の漫画の師が言ったように、自分の作品に呑まれたりしないように、冷静に眺める術は身に付けていないといけない。

だからこそ僕は蓮を殺すこともできた。逆にいえば、そういう類いの人間に耐性があるわけでもないのだ。その感情を理解してあげられるわけでは、ないのだ。

だから僕は、それに対して返事をしなかった。自分が安易に蓮を演じて返事してしまったことを心の底から悔み、もう二度と同じ過ちを起こさないことを誓うと同時に、いくら売れても、ちやほやされても、自分は自分の作品を、やはり冷静な目で見なくてはならない、と改めて再確認した。

ところが、その女の子は投書を止めなかった。しかも、止めるどころかどんどんエスカレートしていった。まるで重力加速度のような勢いで、送られてくる蓮へのラブレターは増えていき、とうとう一日一通のペースで送られてくるようになった。

僕は怯えた。自分が全く理解してあげられない女の子から、毎日手紙が送られてくる。それも、僕宛てではない手紙が、だ。止めてくれ、と返事を書こうと思ったが、おそらく彼女は作者「ワタナベワタリ」と「蓮」を、完全に切り離して考えているので、僕が何か言ったところで無視されるだけだろう、と考えた。しかし、だからといって、また蓮を名乗って呼びかけても、それでは本末転倒だ。読まなければいい、読まなければ何の問題もない、と違って一時期は無視をしていたが、やはりその手紙がポストに投函されるというだけで、僕は少し恐怖を感じるようになっていった。内容が問題なのではない。送られてくることが、問題なのだ。例えば悪いけれど、

「不幸の手紙」みたいに。

悩み抜いた末に僕がとった決断は、やはり蓮に直接、手紙の投函を止めるように言ってもらった。というものであった。

《摩天楼》作中で、蓮に「ラブレターとかファンレターとか反吐が出る」と言わせたのである。

手紙は無事、来なくなった。僕が読者からの影響で自分の作品をいじくったのは、これが今のところ最初で最後だ。

莉子から二年ぶりに携帯に電話があったのは、担当に「ひと月だけ《摩天楼》を休載して様子を見る」、と言われた直後だった。僕は変に緊張してしまって、着信音が鳴ってから通話ボタンを押すまで二十秒もかかってしまった。それまで切らなかった莉子もなかなかすごい。なんで携帯にかけてくるんだろう、と一瞬思ったけれど、よく考えたら莉子は僕の固定電話の番号はおろか、その存在を知らないのだった。僕が固定電話を買ったのは、莉子と別れてからだ。

「お久しぶりですね」莉子が笑いを口に含まながら、ふざけた調子で言う。

「久しぶりなのは誰のせいだ」僕はぶっきらぼうにそう答えた。

「すみません、わたしがいきなり携帯の番号変えたからです……」相変わらず半笑いで莉子が言う。別れて半年ほどたったある日、思い立って連絡してみようと思ったら、おかけになった電話番号は現在使用されていなかった。

「どうしたんだよ？ いきなり連絡してきて」僕は声が上ずらないように注意しながら言う。

「なんか最近大変そうじゃない。ちょっと心配になったっていうか」莉子は昔と変わらない、少し子供っぽい話し方で言った。僕はこの話し方のせいで、出会いたての頃は莉子のことが苦手で仕方がなかったのだった。

一つ思い出すと、まるで夜の街の街灯のように、一斉に記憶に明りが灯りだした。僕はその記憶の一つ一つが馴れ馴れしく蘇ってくるのが、なんとなく気に食わなかった。あのときいとも簡単に僕を突き放したくせに。

「大変だよ。頭がおかしくなりそうだ」僕は淡々とした調子でそう答える。なんとなく隙を見せるのが嫌だったけれど、しかし強がるのも格好悪い気がした。

「ちゃんと毎日食べてるの？」

「なんで？」

「声に張りが無いもん。どうせ夜しかまともに食べてないんでしょ？」

図星だった。さすがに昔四年も付き合っていただけある。

僕が黙ってしまうと、莉子は少しせき込んだように言った。「これから暇？」

「これから？」時計を見ると二時を少し過ぎた頃だった。

「うん。とりあえず外に出てきなさいよ。ちょっと遅いけど、お昼、一緒に食べない？」

「ん……………」

僕は一瞬悩む。莉子に会うことに対する緊張もあったが、なんだか家の外に出るのが怖かった。しかし、朝からコーヒーしか飲んでいなかったため、胃の中は空っぽである。

「……………わかった。どこに行けばいい？」いつも僕は会う場所を彼女に任せていた。今になって思えばなんて頼りない男なんだろう。

受話器の向こうでは、莉子がこれまたいつものように、待ち合わせの場所を弾んだ声でしゃべる。

あのことろ定番だった喫茶店に着いて、いつもの一番奥の席に進む。これまた昔と同じで、莉子はまだ来ていない。コーヒーを注文して、店員が去った後に、朝からコーヒーばかり飲んでいたので別な飲み物を注文すればよかった、と後悔した。

昔と同じように、僕が一杯目のコーヒーを飲み終わるかどうかというときに、莉子はやってくる。そして、遅れたことに対して何の弁明も謝罪もなしに、よっす、と片手を上げて僕の向かいに座り、キャラメルマキアートを注文する。

「久しぶり。元気してた？」

その言葉を聞いて、僕はデジャヴに連続で襲われていたような変な気分から覚めて、今が僕の思い出の中の映像ではなく、確かな現実であることを思い出させられた。

「元気なもんかい。めちゃくちゃだよ」

「だろうね、世間を見渡す限り」莉子は歯を見せて笑う。まるで自分の歯の白さを見せつけるかのような笑顔だ。「トオルの描いた漫画がここまで社会現象を巻き起こすなんて思ってもみなかったよ」

「ん、まあね……」まるでこの一連の〈蓮騒動〉を、誇らしく思っているかのような莉子の口ぶりに僕は面食らう。確かにここまで、世の中の人間の心に影響を与え、人々に一筆したためさせたことはすごいことなのかもしれない。しかしそんな僕を好意的に評価してくれる人は、なかないなかった。

僕たちは挨拶をそれくらいにして、それぞれお昼ご飯を注文する。

「変わってないね、ちょっとびっくりしたよ」僕はスープを飲みながら言う。

「当たり前じゃない。二年しかたってないんだから」

「二年もあれば、人間変わるのなんて簡単だろ？」

「まあ、あなたは変わったね……。一気に老けちゃったんじゃない？」

「……いろいろあったからね」なんとなく手を当てた顎は、髭が伸び放題だった。

「いろいろあったのはここ半年くらいのことでしょ？」

「正確には四ヶ月かな、蓮の問題があってから。けど、それまでだってずっと大変っちゃ大変だったんだよ」

「そうなの？　きっと今頃笑いが止まらないんだろうなああって思いながら見させてもらってたんだけど」

「別れてからも〈摩天楼〉読んでたの？」僕は驚く。

「そりゃ読んでたよ、単行本派だったけどね。……あ、別にトオルは関係ないよ？　単純に話の続きが気になってっただけ」

「僕は関係ない、ね……」その言葉で頭の中で何度も反芻する。〈摩天楼〉に、僕は関係ないか。〈摩天楼〉は〈摩天楼〉、僕は僕。一人歩きってこういうことなのか。担当に何度も言われた言葉だったはずなのに、何なのだろう、この胸のえぐり方の違いは。一人の一般読者としての莉子の意見だからだろうか。それとも。

「連載再開の目処は立ってないの？」莉子が、スパゲティをフォークに絡ませながら言う。

「正直ね、俺がどうにかしようと思えばどうにかなるのかもしれない」

「どうにかしようと思わないの？」

「どうにかしたいとは思ってる。けどそのどうかか、が思いつかないんだよ。俺のしたいことと、世間が俺にして欲しいことにズレがでちゃってんだよ。板ばさみなんだよ」そこまで言っ僕は顔を上げる。

莉子は僕の目をじっと覗き込んでいた。

昔からこうだった。莉子は僕のほうを見ない。正確には僕を見ているのだけれど、僕の目の奥に映った自分や、自分の背後の景色を眺めているとしか思えないような、変な感じがするのだ。見透かされているのとも少し違う、この人は本当は僕になんて何の興味もないのではないだろうか、と勘ぐってしまうような。目を見つめられているのにも関わらずだ。

「どうしたんだよ」いたたまれなくなった僕は、少し慌てながらそう言った。なんだか非難されている気持ちになったからだ。

「じゃあ」莉子はまだ僕の中から視線をそらそうとしない。「もう未練はないの？」

一瞬、莉子と別れたことについて聞かれているのかと思った。しかしそんなわけではない。

「あるよ。完結させたい、もちろん」そこだけははっきりと頷ける。「愛着があるから。こんなところで投げ出したら、申し訳ないよ。鉄平にも、かずさにも、愛着があるし、あの世界にも愛着がある。……もちろん蓮にも」

「蓮にも」

「うん、蓮にも」僕は繰り返す。「別に俺は蓮が憎くて殺したわけじゃないんだよ。ただあれは、物語の進行上仕方がなくて」

自分で自分の目が泳いでいることに気がついた。

何で僕は動揺しているんだろう。

「……………どうしたの？」莉子が僕の目を覗き込む。

「俺はさあ」僕は莉子を見ない。「俺は、蓮が憎かったのかな」

「憎かった？　なんで？」莉子は淡々と言う。

「俺は〈摩天楼〉って漫画が大好きで……………。なんていうの？　〈摩天楼〉を描いているのは自分だっけことがすごく誇らしいっていうか。だからその中で活躍してる登場人物たちもみんな大好きで、敵味方問わず大好きで、誰にも渡したくなくて」僕は何をしゃべっているんだろう。莉子にこんなこと言ってどうするんだ。弱音でもなければ強がりでもない、泣き言でもなければ見栄でもない、僕がプロの漫画家であり続けるために、無意識に胸の奥底へと封印していた感情が、ずるずる引きずられるように現れる。

「著作権の話をしているわけじゃないのは分かったけど……。一般人の私にはあまりぴんと来ない話かもね」莉子は嘘をつかない。大げさに同情したり、理解できない話に同調したりはしない。それがわかっていたから、僕はこんな話をする事ができるのだ。

「だから、〈摩天楼〉が誰かに奪われるなんて耐えられないことなんだよ。それがたとえ、自分の生み出したキャラクターであったとしても」

「蓮に〈摩天楼〉を獲られそうだったってこと？　だから蓮を殺したの？」

「……………分らない。正直分らないんだって。ただ、そう聞かれても違うって言い切れないんだよ。違うって口では言ってるけど、どっか頭の中じゃ否定し切れないんだよ」

「じゃあ、きつとトオルは蓮が憎かったんだよ」莉子は僕の目の奥の奥の奥を覗き込む。「別にそれだけが動機じゃないんだろうけど、きつと蓮が〈摩天楼〉からいなくなることで、トオルははっきりさせたかったんじゃないの？　〈摩天楼〉の人気の理由が、自分の技量なのか、蓮のおかげなのか。〈摩天楼〉に引ッ付いて回る蓮の評価を消して、ひとつの作品として勝負したかったんじゃないの？」

蓮の価値が作品自体の価値よりも膨れ上がってしまったことが、気に食わなかったのだ。そう考えると、妙に気が楽になった。

ずつと形を持たず、変幻していた気持ちに、名前がつく。

僕は蓮を殺すことによって、〈摩天楼〉をリセットしたかった。

「そっか。そうなのかもしれない。……………なんかすっきりした」気づいたんじゃない。認めただ

けだ。それなのに、この爽快感は何だろう。不思議と食欲が出てくる。僕はほとんど手をつけずに残っていたオムライスを、スプーンですくって口に運んだ。

「それはよかった」 莉子はようやくすがすがしい笑顔を見せる。見ているこちらが嬉しくなるような笑顔だった。

「ありがとう」僕は素直な気持ちでお礼を言った。「そういえば、莉子は最近どうなの？ ファッション雑誌のほう上手くいってるの？」

「ああ——」莉子はパスタの最後の一口を口へと頬張り、ゆっくりと嚥んで呑みこんだ。「私、今はファッション雑誌では書いてないの」

「ええ？」僕は驚く。あんなに自分の仕事に誇りを持ち、職人のような情熱で一つ一つの記事に取り組んでいた莉子からは連想できないことだった。「どこに移ったの？」

「ん？」ナプキンで口元をぬぐいながら、莉子は言う。「フリーでやってるの。面白そうな話題を見つけたら、それを記事として起こして、いろんな出版社に持っていくわけ。そしたらそれを買い取ってくれて、雑誌に載せてくれるの。私の名前は結構その筋じゃ有名だから、最近じゃ待遇も良くなって、なかなか原稿料も弾んでくれるの」しゃべりながら莉子は席を立つ。僕は少し複雑な気持ちでそれを聞いていた。当時あんなに情熱的に仕事に向き合っていた莉子が、お金のために記事を書いていることが悲しかった。

「じゃあ、今日の勘定は私が持つから……ごちそうさま」

「え？」ごちそうさまはこっちの台詞だろう、と思って僕が首をかしげるのを横目に、莉子はさっ

さと席を立て勘定を済ませ、店を出て行ってしまった。

取り残された僕は、すっかりしたのと同程度のやるせなさをどうにも持て余していた。なんとなく、これからまた、莉子と何かが始まるんじゃないか、とか、都合のいいことを考えてしまっていた。なんだか自分がみすばらしい人間のように思えた。

しかし、気持ちの整理はついた。次の一步をどの道に踏み出すべきか、なんとなく指針が定まったような気がした。

のも、つかの間。

莉子の言ったごちそうさまの意味は、翌週の週刊誌各誌に、僕の赤裸々な告白の記事が掲載されていたときに初めて気づいた。

僕は自分のプライドのために蓮を殺した哀れな男として、世間のさらし者になった。

いい加減バニックになった担当からの電話は今週に入ってもう十を超えていた。雑誌が出て、僕の腹に抱えていたものが色鮮やかに脚色されて世間の人々に届いた今、その反響は予想をはるかに超えたものだった。担当や出版社の人々は画策して、雑誌の増刷停止や、垂れ流れた情報の操作を試みたが、どれも失敗に終わった。〈摩天楼〉の連載再開なんて夢のまた夢だ。

僕は空っぽになっていた。

世間は騒ぐ。僕がただの漫画家であったときとは比べ物にならないほどの騒がれようだ。

僕は表現者になりたかった。僕の表現を世間の人々に届け、理解してもらいたかった。それがいつのまに、僕の描いたものは消費物になってしまったんだろう。世間の求めるものを産み続けるだけ。それが紙とペンでできているだけじゃないか。そこに僕の意は存在しない。蓮が生きている限り。

僕は結局食い物にされるのが嫌だったのだ。それがどうだ。莉子に食われ、世間に食われ、もう僕はただの食べカスだった。

描きためていた原稿の束を眺める。蓮が死んだ後の展開を描きつづったものだ。いつになるかわからないが、いつか世に届ける日が来ると思っていた。

もう世の中は僕を作家として見てはくれないかもしれない。今でも、応援してくれる人は少なからずいるし、雑誌に掲載された、莉子の描いた記事を読んで、逆に感銘を受けたという人もいた。いわゆる蓮のファンではない人たちだ。《摩天楼》を支持してくれていた人たちの中で、だいたい二割前後の割合を占める人たち。そのひとたちのために、僕はまた筆を握るべきなんだろう。また連載が再開したところで、僕の描いたものを百パーセントの純粹さで読んでくれる人は果たしているのか。

そんな漠然としたことを考えながら、僕は僕で自分の貯金を食いつぶしているとき、それは起こった。

「自殺者が出ました」

僕と外界をつなぐのは、テレビと担当だけになりつつあったある日、電話口でいきなりそう言われた。

「――は？」

「だから、自殺者が出たんです。十代の女の子です。遺書に、蓮が死んでしまったことと、ワタナベさん、あなたへの恨みつらみが書いてあったそうですよ」

淡々としている担当の声が、なんだか現実から遠いところでささやいているようで、まるで耳鳴りがひどいときのように、僕は固まってしまっていた。意味がわからない。

死んだといったって、所詮、ただの、漫画の登場人物じゃないか。恋人が死んだわけでもあるまいし。どうしてたったそれだけのことで人生を諦められるんだ。

意味がわからない。全然意味がわからない。

「親御さんが訴えるって言ってます。……正直どうなるかわからんです。裁判になるかもしれないね。おそらくもうすぐテレビでも報道されますよ。漫画のキャラの死に胸を痛めた少女が後追い自殺って。もうあんた、漫画家っていうよりスキャンダルが売りのタレントみたいになっ
てんじゃないかよ」

担当は笑っている。僕も笑うべきなのか？

非常識すぎる。考えられない。そんな理由で死ぬ人間なんかいるはずがない。

「事実なんですか？ その話は本当なんですか？」

「本当ですよ。ちゃんそこちだって調べたんだ。友達のいない、いつも一人で読書ばかりし

ている子だったそうです。本当に、蓮だけが心の支えだったのかもしれない」皮肉っぽい口調で担当は続ける。「だから言ったんだ。だから言ったんだよ。ろくなことにならねえって。俺の言うこと聞いてりゃ、今でも人気漫画家でいられたのによ。ただの世間の食いもんじゃないか。《摩天楼》があんたの嫌いな商業作品に成り下がっても、あんた自身が世間様の消費物になっちゃうことなんかなかった……」

僕は無意識に受話器を置いていた。

自殺した少女と、僕が初めて蓮を装ってファンレターの返事を書いてしまったあの子がなぜかダブって見えた。

いや、こんなのは幻想にすぎない。だって顔も見ることがないのだから。

自分に言い聞かせても、僕の中の少女は、こちらを恨みがましく睨みつける。蓮を返して。私の心の支えを返して。

僕はうずくまって頭を抱える。汚れっぱなしの部屋からも、電話からも、描きかけの原稿からも、目を背けるように。

もう何も見えない。

いつの間にか季節は冬になっていた。

明りを点けていない僕の部屋は、真っ暗で凍えそうだ。ストーブはどこだ。しかし椅子から立つ力がわかない。最後に何かを食べたのがいつか思い出せない。力が出ないはずだ。自分の手を

見る。ペンダコが消え、骨ばっている。ひどく寒い。何か羽織るものがほしい。しかし椅子から立つ力がわからない。最後に何かを食べたのがいつか思い出せない。力が出ないはずだ。自分の顔が、月明かりに照らされた窓ガラスに映る。自分の顔のはずだ。見たこともないような男がそこにいる。

明りと暖が欲しい。ポケットを探る。

銀色のライターが出てくる。いつからそこにあったのかを思い出そうとするが、全く心当たりがない。まあいい。

僕はその辺にあった紙をひと束つかんで、火をつける。

なんだかたくさん絵が描かれたその紙の束は、面白いように燃えていく。

なんて暖かいんだ。

あやかし道中

坪井 希

慶長八年より始まり、以後二百六十年続く江戸時代。これはその揺籃期の出来事である。

長谷川清四郎は街道の真ん中に仁王立ち、威圧的な三白眼で薄^{すすき}の原を眺めていた。

裾が黒く縁取られた野袴と、後ろに切れ目のある背割羽織。そこに菅笠を携えた、典型的な旅装束である。腰に下がった二本の刀が、刀袋が被せられているにも関わらず異様な存在感を放っていた。

少々えらが張っているが、彫りの深い精悍な顔立ちはいかにも名のある武士といった感じがする。きっかりと前を見据える目は、肌が浅黒いぶん白眼が目立って、更に大きく見えた。

秋のものとは思えぬ冷たい風が、ひょうと音を立てて彼の両脇を吹き抜けた。清四郎は眉ひとつ動かさず、ただ固い地を踏みしめて道の先を睨む。

ぐう、と腹が低く鳴った。

「……いかん」

額を抑えて首を振る。薄が稲穂に見えていた。

指が触れている、やけに広い前額部から頭頂部にかけて部分はちっとも整えられていない。髪が若干伸び、中途半端な五分刈りのようになっていた。

この部分があざやかに剃りこまれていなければ、江戸っ子からは笑われる。武士としてあるまじき姿であった。どこことなくたびれた感じのする本多鬘からは、髪が数本飛び出している。

腹の虫がまた鳴いて、清四郎は促されるようにふらふらと歩きだした。

瘦身の割にしっかりとした背中では、風呂敷に入った空っぽの弁当箱の中で木箸が転がり、カラカラと悲しい音を立てる。

とうとう太陽までもが光り輝く饅頭に見えだした。

夕日に照らされた甲州街道、飯屋の影は見当たらない。懐は中秋どころか嚴冬であることを思い出し、清四郎は暗澹となった。

「武士は食わねど」とはよく言うが、実際食わねば人は死ぬ。やせ我慢にも限度があった。江戸を出るとき持ち出したものでこれまではなんとか凌いで来れたが、職の無い状態のまま、ましてや徒歩で郷里に帰れるわけではない。

なんとか食い扶持を見つければ――。

第三代將軍家光公を擁する江戸幕府はここ数年で支配力を更に強め、武家諸法度違反やお家騒動、無嗣などの理由から簡単に大名家を取り潰した。御定め事に触れず肅々と幕府の命に従ってきた大名家も、参勤交代制によって財政が逼迫し、人件費を削減するために身分が低い者からど

んどんと解雇していった。

そのため巷には今、牢人——浪人が溢れている。清四郎もその一人であった。

大名行列に加わり、肥後の国からはるばる將軍の御膝元までやって来たのが二年前。わずか八百日後に自分の藩がなくなってしまうなんて、その頃は思いもしなかった。三年経って肥後に戻れば、江戸の女と違って純でしとやかな娘たちが、都の風を浴びて垢抜けた自分を放っておかぬだろうと……そんな妄想は結局のところ、一部分も実現しなかった。

現実は厳しい。藩が潰されたという事実をちゃんと飲み込み消化する前に、清四郎たちは悲壮な顔をした御家人から足輕長屋を叩きだされた。

「藩が潰れて任も解けた。このままここに留まり、我々から職を奪った將軍様のお城を見上げて暮らすのは癪に障る。皆で国に帰ろう！」

むかつ腹を立てた清四郎は共に住処を追われた仲間たちにそう言った。断られた。

「一人で帰れ」

皆、寺子屋を開いたり、町道場に入るなどして、江戸に留まる道を選んだのだ。家族や恋人があったためである。

しかし清四郎の両親は既に骨と化し、故郷の土に埋まっている。肥後の村でも江戸の町でも恋人一人いなかったのは、清四郎があんまり御勤めに熱心なので女たちが気後れしたからであろう——と、本人は信じていた。

二十八になるが背負うものは一つとない、そして未だ垢抜けぬ芋侍である。

そんな清四郎の後ろを三步下がってついてくるのは、美しい大和撫子ではなく、酒と汗のおいさをさせたむさ苦しい小男であった。

そいつも先刻黙って置いてきた。男など待つ義理は無い。

ふん、と鼻を鳴らした清四郎の背に、情けない声がかかった。

「旦那、旦那。小便くらい待ってくれたっていいじゃありませんか」

「やかましい。美しい薄がお前の汚水で濡れるのを眺めているほど暇ではないのだ」

「そんな辛辣な」

菅笠を揺らし、ひょこひょこと飛ぶように駆けて来たのは、先ほど置いてきた弥助である。生まれは前橋と言っていたので肥後とは縁もゆかりもない筈だが、府中の手前で「供をさせてくれ」とついていた。

実を言うと友ですらない。弥助は宿場町の門前で清四郎に襲いかかった野盗であった。

洒落た浪花本多鬘とぼろぼろになった着物がひどく不釣り合いで、自分を棚に上げて思わず噴き出したのを覚えている。よほど腹が減っていたのか動きもへろへろで、返り討ちにするのは容易だった。短刀の他に鎖鎌や匕首、仕込み刀まで持っていたのには仰天したが。

元は江戸を本拠としている博徒衆、斑目一家の一員であったらしい。とある不始末をやらかしたせいで命からがら江戸を逃げ出し、口糊するために仕方なく追剥を始めたのだという。徒党も組まずたった一人で侍相手に向かって来たのは、つまりそういう訳であった。

「しかし弥助、お前本当に肥後までついてくる気か」

「へい。斑目の声つつうのは会津から明石までは普通に届いちまうんで。最低でも出雲までは行かねえと、枕高くして寝らんねえんです。あっしみてえな下っ端にそこまで固執しねえとは思いますが……ま、そこはそれ」

「念のため、と言うわけか」

「命ァ一つっきりしかありやせんから」

何があっても大事にしなくちゃね。

からからと笑いながら、弥助はそんなことを言う。

誰かと共に行動すればかつての仲間に見つかる可能性は下がり、万一見つかったも連れが自分のような侍ならばどうにかなると、そういう腹であろう。

「……まあ、『旅は道連れ』と言うしな。妙なことをせんなら、ついてくるなり何処かで離れるなり勝手にしろ」

武器を全て取り出し手前に並べ、「あっしも連れて行って下せえ」と頭を下げられたとき、清四郎には彼を追い返すことが出来なかった。道中で寝首を搔かれる心配もなくはなかったのだけれど、肥後までの長い道のりを考えれば供はいた方が良い。事実、言葉や扱いは辛辣でも弥助と軽口を交わすのは面白かった。

利用されているばかりかという、そうでもないのだ。

「旦那！」

弥助の弾んだ声が耳に飛び込んで、清四郎ははっと我に帰った。

いつの間にか追い越されていた。弥助は清四郎の数歩前に立ち、興奮した様子で薄林の向こうを指している。

太い眉が持ち上がり、その下の団栗眼だんりがんは更にかっ開かれていた。「町だ、町だ」と繰り返しながら、弥助はその場でびよんびよんと跳ねる。

「塀とかがどうもそんな感じだ……旦那、ありゃあ色街ですぜ」

「馬鹿言え、そんなものあるわけないだろう」

宿場町の近くに飯盛旅籠があったりするのはそれほど珍しいことではない。実際清四郎も、江戸に参るときにいくつか見かけていた。

しかし甲府の町を出て二日足らずだ。諏訪まではまだだいぶん距離がある。近くに寺社があるとも聞いていないから、ますますこんな場所に遊里があるとは思えなかった。

目を凝らしても薄ばかりだ。首を傾げる清四郎に、弥助は齒痒げな声を出した。

「あるんですってェ。ほら、あの大門！ 見えるでしょう！」

声に呼ばれたかのように、強い強い風が街道を駆け抜けた。

さざざと音をさせて薄がしなる。黄金色の林が割れて、ちらりと赤い色が覗いた。

「……あれか」

風がやんだ途端薄の幕に隠れてしまったが、あれは確かに門であった。ぼんやりと、塀らしき灰色の影も見えた気がする。ほらね、と胸を張る弥助に清四郎は呆れた。

「お前、どんな視力をしているんだ」

「女か飯がある所ならすぐに見つけられやすよ。さ、旦那。行きましょ行きましょ」

「行っても遊ぶ金はないぞ」

「なんとかなりやすって。遊び女^めだろうがお店^{みせ}の娘さんだろうが、女つうのはいい男には簡単に飯食わしてくれるんです。きつと熱^{あつ}爛^{らん}も付きますぜ」

鼻歌を歌いながら、弥助はどこからか鎖鎌を取り出して目の前の茂みを薙いだ。腰の高さになった薄の茂みを掻きわけながら、清四郎も後に続く。

歌こそ歌わないけれど、色男と言われてまんざらでもなかった。美しい芸妓より先に豪華な膳が思い浮かぶほど飢えていたが、足取りは急に軽くなる。

「そうか、ならば全く問題はないな。伊達男とは便利なものだ」

「ええ、ですから旦那はどっかりと構えていて下さいよ。飯や酒だけじゃなくこれからの旅賃^{ちか}ま^まで、あ^あっ^っしのこの可愛^{かわい}いお顔^おでし^しっかり稼^{かせ}いでみせやすから」

一転渋い顔になった清四郎は、小男の後頭部を鞘でぶん殴ってやろうか暫く思案した。

調子っぱずれな鼻歌が、夕焼け空に響いている。

「妙なところだな」

「そうですねえ……」

さりさりと、草鞋が地を擦る音がする。清四郎の呟きに、いささか興奮が静まった弥助も同意

した。

「なんだか作り物くせえ街ですね。歌舞伎か浄瑠璃の舞台みてえだ」

まず堀がないのが違和感の始まりであった。番人のいない門をくぐると、兵衛番所はぬけの殻。怪訝な顔をしながらもそのまま進めば、目抜き通りの真ん中でくつろいでいた猫たちが一斉に方々へ散って行った。

髪結床やかんざし屋、料理茶屋に水菓子問屋とお店が続く街並みは他の岡場所と変わりはしないが、それらは全て閉まっている。そろそろ夜見世の時間であるというのに、廓の前で客を呼び込む牛太郎の一人も見当たらない。清四郎たち以外に誰かがいる気配はなく代わりに至る所で猫を見かけた。こんなに野良がいるのだから、餌をあげる人間だっている筈なのだ。

こき、と音をさせて清四郎は首をひねる。

鼻をつく匂いもする。まさか塀の外をぐるりと囲む銀杏のせいではあるまい。それとは別種の異臭、なんだか、獣臭い――。

「おい弥助。これは、」

「ああ！ やっと傾城屋が！」

目抜き通りの一番奥、二階造りのお店を見つけた途端弥助は声を上げて駆けだした。待て、と怒鳴ってみたが効果はなく――弥助は唯一灯りのついた遊女屋、そのぼっかりと開いた口に吸いこまれていく。まったく驚くべき速さであった。

「女のことしか頭はないのか、阿呆め」

顔を擧めて舌打ち一つ、清四郎も力強く地を蹴った。

「……何をしている」

荒い息を吐きつつも表情だけは威厳を保って、清四郎は低い声を出した。

「何って、飯いただいてんですよ」

きょんとした顔をすぐににやけさせ、弥助は幸せそうに握り飯を頬張る。斬り捨てたいのを堪えながら、清四郎は頭を振った。

「あ、心配しないで下せえよ旦那。握り飯はもうありやせんが、これから夕餉を出してくれるそうです。いやいや、あっしも罪な男ですねぇ」

何かが切れた清四郎が刀に手をかけたとき、弥助が背にしていた戸が開いた。

「おわっ」

強すぎる香の匂いが鼻をつく。

清四郎は三白眼の目を見張った。

「あれあれ弥助さんたら、膝枕を所望ならわっちが座ってからおくんさんし」

自分の足に身体をもたせかけた弥助を見下ろして、遊女がころころと笑っている。

鴉の濡れ羽のような黒々とした結い髪に、牡丹飾りのかんざしが映える。ぷっくりとした唇は鮮やかな紅。梅樹の模様が描かれた紫ちりめんの小袖は、金箔銀箔が貼られて見るも眩い。

ちらりと覗く白い肌から視線を逸らす前に鎖骨の窪みを見つけてしまい、思わずごくりと唾を呑んだ。

ここで初めて、遊女が清四郎をまともに見る。

「あら、こちらが例の」

「あっ」

ぱっちりとした縦長の目と視線がぶつかる。女慣れしていない肥後の芋侍にとっては堪ったものではなかった。先んじて口を開いたものの何と言って良いか分からず、血が上った頭が真っ先に浮かべた言葉をそのまま吐きだす。

ひっくり返った奇妙な声が、喉の奥から零れた。

「だっ、太夫は」

一瞬、なんとも言えぬ沈黙が降りた。

ひく、と女の白い頬が引き攣っている。自尊心をいたく傷つけられたらしい。

「わ•っ•ち•が•禿•か•新•造•に•でも•見•え•ん•し•た•か•……•わ•っ•ち•が•、•わ•っ•ち•こ•そ•が•夏•梅•太•夫•で•あ•り•ん•す•」

料理が出来るまでそこで待ちなんし、ときつい声で言い捨てて、夏梅太夫は奥の部屋に戻って行った。

ぽかんとした清四郎の隣り、弥助がしみじみとした顔で言う。

「……旦那、今のはねえや」

「何でだ」

「何でって、もっと先に言うことがあるじゃありませんか。別嬪だねとか、着物が似合うとか、見とれちまったとか」

「俺は『太夫はそなたか』というようなことを言おうとしたのだ。……あの女が何故急に不機嫌になったのか、さっぱり分からん」

「あっしは『太夫はいないのか』って意味に取りましたがね……まあどっちも、そこまで変わらねえや。旦那の唐変木」

女を買いたくて仕方のない野暮天にしか思われなかっただろう。それに花魁は総じて気位が高い。今のは失言にもほどがあると弥助は思った。

見てくれはかなりの男前、背丈だって並み以上の清四郎にこれまで恋人がいなかったのは、ひとえにこの性格のためである。

根は優しいが愛想はなく、気の利いた台詞や褒め言葉も知らない。つまらぬところで意地を張る。他人の、特に異性の心の機微に疎い上、あがり性がたたって要らん言葉を吐くこともしばしばだった。

腕を組み、清四郎は口を尖らせる。女が怒ったのも、弥助に呆れられるのも納得がいかなかった。なんとなく面白くない。

「俺は謝らん。謝るものか、女になんぞ」

「なに意固地になってんです。まあ太夫だって事を蒸し返されちゃいい気はしねえだろうから、いいんじゃないですかね。ただもう御機嫌を損ねるような言は無しですぜ、旦那」

ひそひそ声で耳打ちした弥助は、ぱっと清四郎から身を引いた。再び戸が開いたのだ。

気を取り直したらしい夏梅が、二人の娘と共に酒と膳を運びこむ。飯櫃、湯桶、本膳、大平、二の膳三の膳と並べ終わると、丁寧に一礼した。

「さて——江戸からここまでの長旅、お疲れさまでありんした。せめて今宵は疲労を癒して、心ゆくまで楽しんでくださいんし」

それからばん、と柏手を打つ。

「まずは膳から、さ、召し上がれ」

「……かたじけない」

「わ、こりゃあ美味えや！」

豪勢な料理をがつつく二人の男に、娘たちはにこにここと酌をしている。

そんな光景に背を向けると、夏梅太夫は口の端を吊り上げ——にい、と笑った。

弥助のすっとんきょうな悲鳴で目が覚めた。柄にかけようと思った手が、動かない。両手の親指を背中にくぐられ、更に身体にぐるぐると縄が巻かれていた。

視線を身体から部屋に移す。

外で感じた獣臭さの正体が知れた。

「おや、起こす手間が省けたね。眠り茸を漬けた酒、美味しかったでしょうお侍さん」

「……化け物」

「あら失礼」

猫又を御存じない、と、夏梅太夫はごろごろと喉を鳴らした。先ほどよりも大きく見える目が金色に光る。つんと上を向いていた鼻先は丸みを帯び、やわらかな桃色をしている。肌の白さは白粉ではなく、本物の毛だ。着物の裾から、細い尻尾がちょろりと出ている。やられた、と清四郎は舌を打った。

同じ格好の弥助は必死に身をよじっていたが、この状態での縄抜けは難しいだろう。案の定すぐに音をあげた。

「あ、あっしらを食っても美味かねえぞお」

「分かってるじゃないか。もう食わないよ、人間なんてまずいもの」

なに、と清四郎が目を見開く。

「食うつもりではないのか。……では何故こうして縛っている」

「変化を解いて、いきなり斬られちゃたまらないからねえ。こっちの安全のためだよ」

お願い事があるんだと、一人称だけ花魁のまま、随分と運っ葉な調子で猫又太夫は語り始めた。曰く――まずこの場所は猫又と狐が作った、偽ものの花街である。ここでは三月ほど前から、猫又が遊女に、狐が男衆に化け、清四郎たちのように旅の途中で足を踏み入れた人間を協力して騙くらかしていた。

人肉は割くのが手間でも悪い。何より人を食ってばかりいたら、すぐに退治屋が来てしまう。

そのため錢や着物だけを奪い、そうして飯に変えていた。

「人に化ければ宿場町にも入れるからね」

夏梅は肩を竦める。

元々猫も狐も、ここから一里ほど先にある御山に、数多の妖怪と共に棲んでいたらしい。しかしここ最近幕府の街道整備で野山が開かれ、他所から御山へ棲みかを移す物の怪が増えた。その分一匹一匹の食物が減り、争いは増え、ある日耐えきれなくなってここまで降りてきた。

これまでも里に下りては人を化かしていた、狐の提案に猫又は乗った。策は思った以上に上手くいき、月に何両も稼げたときもあったのだけれど、額が嵩むうちに互いの取り分で揉め出したという。

「……ま、結局喧嘩別れさね。端っからあいつらとは相性が悪かったんだ。鐺木かいらぎ一座なんて洒落た名前を名乗りやがって、ただの化け狐の集まりのくせに」

口の端から八重歯を覗かせ、夏梅は吐き捨てるようにそう言った。短い毛がざわざわと逆立っている。

親指の血が溜っているのを感じ、清四郎も苛々と口を開いた。

「ここまで黙って聞いてはいたが……話が见えんぞ、猫又。頼み事とやらをさっさと言え」

「せっかちで無粋なお侍だね。もうちょっと黙ってな」

ぴしゃりと言った夏梅もさすがに迂遠だと感じたのか、一度考え込むような素振りを見せると、話を端的にまとめた。

曰く、御山では年に一度化生たちの祭りがある。

曰く、今年は猫又勢が神輿の担ぎ手になっている。

曰く、鎚木一座の娘が他所の狐と結ばれることになったが、一座の連中はその婚礼を来る祭りの日にぶつけてきた。

「いっくら雲ひとつない秋晴れの空でも、嫁入り行列が通りゃまず間違いなく雨が降る。わっちは水が苦手なんだ」

「それを承知の上で式の日取りを決めた、と」

要するにただの嫌がらせである。ここまでくると、清四郎もなんだか興が向いてきた。

狐もなかなか人間臭いことをする。

「あいつら、『あたしら狐衆は婚礼の儀がありますから、祭りにゃ少し後から加わらせていただきます。手伝いも出来ずさぞかしご迷惑とは思いますが、吉事が重なるってえことで一つご勘弁を』と、こうさ。まったくふざけてるよ、いけしゃあしゃあと」

全身の毛が立ったせいで、太夫の身体は一回り大きく見えた。

弥助が「ひっ」と声をあげたが、清四郎は気にもしない。

「とりあえずこれで合点がいった。雨を呼ぶ狐の嫁入りを、俺たちが止めさせればいいわけだな」
「何も結婚自体を御破算にしようってんじゃない。日を改めさせるとか、とにかく御山に雨が降らなきゃいいんだ……なんとか頼むよ、お待さま」

夏梅は肉球のついた手を合わせ、清四郎に擦り寄ってきた。獣臭さに混じってふわりと香が

匂う。

人間に化けていたときの姿が一瞬よぎった清四郎は、誤魔化すように咳払いをし、頷いた。

「まあ、そうだな——武士たるもの一宿一飯の恩義、返さぬわけにもいくまい」

「ちょっと旦那あ。あっしは絶対嫌ですぜ、妖怪の相手なんておっかねえよ」

「黙れ、元はと言えば此処に駆けこんだお前のせいだろうが」

「さすが侍、話が分かる。じゃ、決まりだね」

太夫の爪がひらめいたかと思うと、縄はばらりと解け落ちた。

人の姿に戻った夏梅が、艶やかに笑う。

「祭りは明日の辰の刻、嫁入り行列は寅の刻からでありんすえ。……しっかり頼むよ、お二人さん」

草木も眠る丑三つ時だが、二人の男は連れだって目抜き通りを歩いていた。明日の策を練っている内、気持ちがいやに高ぶって寝付けなくなったのだ。

行列は清四郎たちも歩いてきた街道を通り、御山の方へまっすぐ向かってくるという。ぎりぎりまで薄に隠れて待ち伏せていた清四郎がそれを迎え撃ち、反対方向へ追いついて立ち止まるといふこととありあえず話はまとまった。

「お前の役目をどうするかな」

「あっしは此処にいたいんですがね……」

「そんな意見が通るか。そうだ、お前は本道から二町ほど離れた場所に潜んでいろ。あっちにも、薄の刈られた細道があるそうだ」

げ、と弥助が呻く。

「……もしほんとにそうだったら、最初はあっし一人で狐どもに向かわなきゃいけねえんじや」
青ざめた弥助に、清四郎はくそ真面目な顔で頷いた。

「案ずるな、すぐに俺も行く」

「やだやだっ、絶対やだっ。おっかねえのは御免ですよ。命は一つきりだって言ってるじゃねえですか！」

手足をじたばたさせて駄々をこねる。子供か、と思った。

二町なんてすぐに駆けつけられる距離だ。邪魔な薄のせいでかなり走りにくいだろうが、それでも五分とかかるまい。

小男を放って、清四郎はうんざり顔で夜道を進む。羽織を着ていないせいか、冷気がいやに身に浸みた。ぶる、と身体が大きく震える。

やはり秋ともなると夜は冷え込むな。門のところまで行ったら、戻って布団に包まるとしよう。そう思い足を速めようとした、そのときである。

「——ねえ、おさむれえさん。人間が妖怪の揉め事にしゃしゃり出てくるっての、少々筋が違うと思いませんか」

飄々とした、風に紛れて消えてしまいそうな声が聞こえた。

「……誰だ」

大門の柱を背にし、夜色の羽織をまとった男が立っている。

背だけは五尺と七寸ほどで、清四郎とほとんど変わらない。少し長めの煙管を加え、すい、と煙を泳がせている。その顔は柱の影のせいではほとんど見えなかった。

「あたしの名前は鎗木安吉。たいして生きちゃありませんので、御覧の通り尾っぽは一つ……と、これは隠しておりますが」

男はケンケンと、鳴き声のように甲高い咳をした。もしかすると笑ったのかもしれない。

あくまでふざけた調子だが、狐である以上油断は出来ぬ。

清四郎は刀の柄に手を添え、じりじりと門に寄った。

近づいてみても男の相貌はよく分からない。ただその声と雰囲気は二十歳そこらの若造のようだ。

妖狐の尾は最終的に九つまで分かれるという。そこまでいくと神の域だが、こいつはただの野狐であろう。

清四郎はにっと歯を見せて、意地悪く言葉を返してやった。

「化け狐、何の罪もない人間を化かして手持ちを奪うお前らに、筋がどうこうと言われたくはないな」

「人が山々を開いたせいであたしらは食えなくなったんですよ。……いいじゃないですか、お

命盗ったわけじゃなし」

いい夢見させてあげたんだからと、狐は歌うように言う。

「御客はたあくさん来てくれましたよォ。化かし屋、竈木一座にとって、『猫の花街』は一大傑作でござんした」

「歌舞伎役者のように言うな。所詮まやかしのくせに」

「手塩にゃかけていたんですよ、まやかしなりに。流行り病でだあれもいなくなっちゃった村を、トンテンカンと直したりね……ええ、ま、本当に遊ばせてやったわけじゃありませんけど」

続く言葉に、清四郎の眉は更に寄った。

振る舞ったものが笑い茸とは。食べて死ぬようなものではないが、あれも毒茸の一つだ。「いい夢」どころではなかっただろう。

安吉は煙管の灰をとんとんと落とし、軽く息をついた。

「『あれが夢である筈がない』なんて、何度も来てくれる馬鹿な御客もいましてね——まったく、猫共がごうつく張らなきゃ、もっと続けられてただろうに」

余裕ぶって、人を小馬鹿にしたような物言い。

この狐に直接的な恨みなどないけれど、その話し方がひどく清四郎の癪に障った。不思議なくらい苛々する。自分を追いだした御家人に、声音が少し似ていたからかもしれない。

さ、と地を強く蹴ると、狐の背が初めて門から離れた。

「調子に乗るのはそこまでにしたらどうだ。別に今すぐ斬り捨ててやってもいいんだぞ」

「……同じく人を化かしてた猫又にゃ、お咎め無しですかい」

「一応恩義があるんでな。それに、化かされた阿采のことなど実を言うとうどうでもいい。ただお前の物言いと、……世帯持ちが気に食わん」

嫁入り行列など見たくもないわ。

独り者の僻みが露骨に出た呟き。聞いた安吉は盛大に吹きだした。

くっくと喉をならし、羽織の袖を口元にやる。

「これは正直なお侍さんだ！」

突如、目も開けていらぬほどの強風が吹いた。お店の前に立てられた幟が、ばたばたと音を立ててはためく。

柱の影が見る間に濃くなり、それはやがて黒い霧に変わる。鴉色の羽織は一瞬でその中に溶けた。

「……くそっ」

ようやく風がやんだ。しかし、男の姿は影も形もない。

歯を軋ませた清四郎と、随分遠くでへたりこんでいる弥助の真上、突き抜けるような秋の夜空に高らかな声が響き渡った。

では何があっても邪魔に入らなくていいことですね。

了解、了解――。

街道からきっかり五歩分距離をとり、薄の原に身体を埋めた。

身を低くしなければ見つかってしまうとはいえ、ずっと中腰の体勢を取っているのは苦痛である。時折穂の先が目につかって、涙なんだか朝露なんだか分からぬ水で顔が濡れた。

秋の早朝は真夜中よりもずっと冷え込むことを知る。とにかく寒い。ひたすら寒い。清四郎は小さく悪態をついた。

「狐め、早く来ればいいものを」

もうそろそろ時間の筈だ。少し背を伸ばして薄闇に眼を凝らす。月明かりの差す甲州街道、狐の影は見当たらない。

弥助はちゃんと定位置についているだろうか。何やら大門のすぐ外でぐずぐずしていたので、先に此方に来てしまった。もちろん「絶対に来い」と厳命しておいたが、一抹の不安は残る。

逃げ出したとはいえ元は博徒であるくせに、呆れるくらい臆病なのだ。危険からは全力で逃げたがる。その分用意周到というか狡猾で、助かる部分もあるのだが。

「……逃げたら拳骨では済まさん。」

不穏な声音で呟いた直後。

ぽっと、遠くで小さな音がした。

「狐火！」

闇夜にふふよと浮かぶ、月より眩い三つの炎。ここよりざっと二町先、ちょうど弥助のいるあたりだ。

狐火は嫁入り行列の印である。

街道近くの持ち場を放棄し、清四郎は咄嗟に駆けだした。

下草が足に絡む。茫々と生える薄が鬱陶しい。刀を抜き、前を阻む植物を散らしながら細道へ急ぐ。

——いくら甲州道中が広くとも、やはり花街に近い場所を真っ直ぐ通ってくるわけがなかったか。弥助の奴、逃げずに向かっているだろうな……。

細道まであと半町。橙の炎は飛び回ったりせず、ただ波にたゆたう海月のようにふわふわと上下している。

はっと、清四郎は足を止めた。

「……待て」

幼い頃から怪談の一つとして、しばしば話に聞く狐火。その色は赤青橙と様々であったが、共通するのはその火が、祝事の際に人々が行う提灯行列のように見えるということだ。

数えられるほどの灯りでは、遠目からでも行列になど見えない。そして、あそこに浮かんでいるのはたった三つだ。

いくらなんでも、燐火の数が、少なすぎはしないか――。

「どうして足を止めるんですか！」

背後で響いた声に、冷たい手を押しつけられたような衝撃が走った。
かつてない勢いで後ろを振り向く。

今まで切り開いてきた道の上、弥助がちょこんと立っていた。

「弥助、お前こそ何で此処にいる。あそこで待機しろと言った筈だ！」
怒鳴りつけると、小男は怯えたように身体を仰け反らせた。

「す、すいません。ちょっと小便に行ってたもんで……そんなことよりほら、あそこに狐共がいるんですよ。行かなくてどうするんですよ！」

「そんなことは分かっている」

「分かっているなら、ほら！」

急かす弥助のそのなりに、一つの違和感を見つけた。

清四郎は少し考え、相手を見つめる。

「……お前も一緒に戦うのか」

「えっ、何を言ってるんですか。水臭いですねえ——この弥助たとえ命に代えてでも、旦那の役に立ちますぜ」

「そうか」

清四郎は静かに呟き——抜き身の刀を、男の眼前に突きつけた。

しん、と辺りの音が止む。

その場に固まった弥助は顔を真っ青にし、恐慌の表情を作った。だくだくと流れる冷汗が落ち、

乾いた地面を濡らす。

「だ、旦那……どうしてあたしに刀を」

「黙れ」

「そんな、何かお気に障ったのなら謝りますから。この通り、どうか、どうか刀ヲ納めて——」
「命は一つきりだと言っていないかったか、弥助——貴様、いったい何者だ！」

振り上げた刀は空を切った。

後ろに飛び退き、一足一刀以上の間合いを開けた小男は、飄々とした風に呟く。

その声は、甲高どこか卑屈な弥助のものではない。

「『着物をかっぱぎ尻の毛まで抜いてやっても、夜風がびうと吹き付けるまで相手はとんと気付かねえ』——竊木一座の得意口上なんですがね。おさむれえさん一人に見破られるたあ、あたしもまだまだ精進が足らんように」

縞の小袖に股引姿、団栗眼に丸っ鼻。へへ、と小さく笑いを零し、弥助のなりで頭を搔く、そいつはひどく不気味だった。

「姿かたちは上手く真似ても、発言が妙だ。それに……俺の作った道を通ったにせよ、薄の穂が一つもくっついていないというのはな」

「ああ、そりゃあ大失敗だ」

ケン、と一度咳をして、小男はその場でくるりと回る。空気が揺らめき、その姿が歪んだかと思うと、目の前には弥助と似ても似つかぬ別の男が立っていた。

背の丈は五尺七寸。清四郎より八つばかり下に見える。口元はにんまりと笑んでいるのに、そこまで楽しそうな感じはない。細められた涼しげな眼は、こちらを真っ直ぐに射ぬいている。初めて見る面だ。だがその声と、日の出前の空よりも濃い闇色の羽織には覚えがある。

清四郎は刀を構え直し、更に目を鋭くした。

「昨日の狐か」

男は奇妙な声で笑い、ご明察、と手を広げる。

その両の手から一つずつ、燃え盛る橙が現れた。

ひう、と右目に向かって飛んできた炎を、清四郎は身をかがめて避ける。続いて迫ったもう一つの炎は、刀が触れると二つに分かれ、それから消えた。たっつ、と。

反撃に出ようとした清四郎の頭上に、水滴が落ちる。

「……雨！」

「ええ、いい雨ですねエ」

ぽつぽつと、雲一つない空から小雨が降り始めた。立ち塞がる安吉の向こう、今度こそ、提灯行列と見まごう狐火がゆっくりと街道を進んでいる。

まんまと罠に引っ掛かったか。

自分の阿呆さ加減に腹が立つ。その怒りのまま狐に向かって一太刀を見舞うが、簡単に避けられてしまった。

だけ、と低い声で恫喝する。安吉は返事の代わりに傍から薄を引き抜いた。

「花嫁さんはあたしの従姉妹でして。身内の大事な晴れ舞台、邪魔させるわけにゃあいきません」
一本の薄を狐火が舐めるように包み込む。ふっと息を吹きかけて安吉が火を消すと、どうい
わけか、それはひと振りの刀に変わった。

行列は先ほど清四郎がいた辺りに差しかかっていた。このままでは卯の刻までに、一里向こう
で雨が降る。

——こいつに構っている間はない。

一足で間合いを詰めた清四郎は、刀を振るうのではなく相手の右目に真っ直ぐ突きだした。

安吉の顔から笑みが消し飛ぶ。刀で受けると同時に身体を仰け反らせ、体勢を崩しながらもな
んとか眼球は守った。

清四郎はその隙を見逃さない。身体を低めて、全速力で開いた道を駆ける。街道に戻るのが最
優先だ。

「行かせませんぜ！」

頭の上を狐火が滑った。目の下から血を流した安吉が、迫る。

すぐ隣りに並び、再び左の掌から小さな炎を放つ。それは初めて清四郎に当たり、その左肩を
焼いた。

全身に燃え広がる前にと、清四郎は躊躇いなく羽織を脱ぎ捨て——ついでに狐に投げつけた。

「小糞！」

安吉に届く寸前、羽織は紅蓮に包まれて地に落ちた。

隠す余裕もなくなったのだろう、安吉の肩越しにわざわざと動く尾っぽの先が見える。

化けの皮が一枚、剥がれた。

清四郎は見せつけるように白い歯を剥き、勝ち誇った顔をした。

さっと顔色を変えた安吉が、その尾を激しく地に打ち付ける。

左手から燐火が迸った。

怖気を感じた清四郎は咄嗟に刀を捨て、真横に飛ぶ。そのすぐ脇の茂みを、轟、と音を立てて炎が一直線に焼いた。

刀が、薄と一緒に炎に包まれている。直撃すれば命はなかっただろう。しかしこれが清四郎にとって千載一遇の好機となったことに、二人の男はすぐに気付いた。

橙の炎が薄を焼き払ったことで、二人の立っている場所と街道が一本道で繋がったのだ。

己の演じた大失態に、安吉の思考が一瞬止まる。

それこそが彼の最大の失敗となった。

「しまっ——」

「そこだ！」

だん、と左足で大きく踏み込む。この距離ならばどう回避しようと間に合わない。

二本目の刀を鞘から抜き放つ、その勢いを全く殺すことなく——清四郎は安吉の、その細い腰から右肩にかけてを力一杯薙ぎ払った。

きいんと高い音を立て、空高く弾き飛ばされる薄刀。すすきがたな 狐は六尺ほどぶっ飛んで薄の原に落ち、その姿は草に隠されて見えなくなった。

「……やったか」

肩が大きく上下している。呼吸がうまくいかない。急に重くなった気がする刀をだらりと下げ、清四郎はしばし息を整えた。

妙な感じが拭えない。

柄を握り締めたまま、狐が落ちた筈の茂みに分け入る。

そこには人の姿も、獣の姿もなかった。

心なしか雨足が強まったかもしれない。

まだちらほらと炎が燦る道を、腑に落ちない顔で清四郎は駆ける。

あいつの驚いた顔は見た。がさ、と茂みに背中から落ちた音も聞いた。しかし、煙のように消えてしまうとはどういうわけだ。血は確かに流れたというのに。

「しかし手心えはほとんどなかった」

斬った感触はないのに真っ赤な血は飛んだ。最後の最後で狐が術を使った可能性はある。

逃げたのならそれはそれで良かった。別に殺生が仕事ではない。

「仕事は、これだ」

行列の前に立ち塞がり、先ほど安吉を薙いだ刀を正眼に構えた。ぜい、と息を吐く清四郎の前には、紋付袴に留袖を着た逞しい侍が四人。狐火に照らされた顔つきは皆一様に厳しかった。

見てくれは立派だが、四人の内二人は既に尻尾が出ている。安吉ほどの脅威ではなさそうだ。しかしその数と、先ほど受けた傷が問題だった。じくじくと痛む左肩で、この人数を相手に存分に刀が振るえるだろうか。

……いや。

それでも退くわけにはいかない。お役御免になったとしても、食うや食わずであったとしても、自分は一人の侍だ。

力一杯虚勢を張って、清四郎は朗々と声をあげた。

「鍋木安吉は俺が斬った。……その袴や白無垢を血で汚したくなかったら、退け」
全員をぐいと睨む。寄らば斬る、という念も込めて。

しかし狐たちは刀を抜いた。人間一人、簡単に打ち倒せると思っているのか。それとも、いざとなれば後ろで籠や小道具を担いでいる連中も、向かってくる気にいるのか。

どちらにしてもやるしかない。

街道の空気が一気に張り詰める。

清四郎にとっては聞き慣れた声が、それを見事にぶち壊した。

「旦那あ！」

人一人入れそうな藤籠とうかごを背負った弥助が、真っ赤な顔をさせて花街からようやく駆けつけた。

狐たちは突然の闖入者にどよめいている。充血したまんまるの眼を細め、へらへらしているその顔に、殺意が沸いた。

……こいつ、今になって。

左肩の痛みも忘れ、清四郎はがつ、と小男の胸倉を掴んだ。

「弥助、貴様ア今の今まで何をしていた！ 答えようによってはお前から先にぶった斬るぞ！」
恐ろしい力でがくがくと揺さぶられ、弥助が悲鳴をあげる。

「旦那、待って待ってあっしは敵じゃねえでしょう、離して！」

別にその言葉を聞き入れたわけではなかったが、狐たちが体勢を立て直してきたので乱暴に手を離した。

小男はよろめきながらも清四郎の前に立ち、じめじめとした声を出した。言葉の合間にげっほごっほと咳き込んでいる。

「一人っきりで待ち伏せとか、無理に決まってるじゃねえですか。だって、あっしは、旦那みてえには戦えねえし……化け狐なんて斑目衆とおんなじくらいおかねえしさ」

涙目で背中の籠を下ろす。その隣りに立った。

「……数だってほら、あんなにいるんですぜ。まともにやったら死んじまいますよ、絶対、死んでも死にたかねえのに」

弥助ははあ、と両腕を下げ、大きく肩を落としたかと思うと、ふいに両手で籠の下の方を掴む。ひっく、と、小さくしゃっくりを一つ。

だから、だったら。

「――頭を使うしかねえでしょう！」

その時の弥助の横顔は、まるで別人のように見えた。

ぶわ、と藤籠がぶん投げられ――籠いっぱいに入っていた中身が、ばんばらと嫁入り行列に降り注ぐ。

今度は狐たちが阿鼻叫喚の叫び声をあげた。

雨の匂いを完全に打ち消す異臭が、清四郎の鼻にもすぐに届く。ころころと転がり、つま先の前で止まった物体を見て合点がいった。

「銀杏ぎんなんか！」

「はいな！」

爛々と目を光らせたまま弥助は匕首を投げつけ、『竈木一座』と字が入った提灯の紐を切り落とした。

地面に炎の花が咲く。

転がった銀杏に燃え移り、匂いは更に濃くなった。

ぎああ、と獣の絶叫が響く。

熟した実には深い傷が入られ、おまけにその大半が潰されている。何千何百もの銀杏から立ちこめるのは人間ですら耐えがたい激臭だ。鼻が利く狐たちにとってはまさに地獄だろう。

侍たちは左手で鼻を摘み、刀を放り出して空けた右手でむきだしの腕を掻きむしった。

あちこちで、痒い痒いと悲痛な声。

……そういえば、銀杏を触るとかぶれるな。

清四郎は呑気に頷きながら、弥助の活躍を傍観していた。

猫又以上にぎらぎらと団栗眼を輝かせ、口の端を吊り上げたまま何事か叫んでいる。罵声に聞こえるときもあるし、なにやら歓喜の雄たけびのように聞こえるときもあった。

ヒ首が二本三本と宙を飛び、鎖鎌の耳障りな音がじゃんじゃらじゃらと、その場にいる者の耳をつんざいた。

侍に化けた者、玉鈴を持った者、長持ちを担いでいた者。楠木一座の面々はもう自分の役割を演じるどころではない。鼻を覆い、肌を掻き、着物に燃え移った火を必死で消そうとしている。

大恐慌に陥っている狐たちを、弥助が更に追いたてた。

「撤退、撤退！」

行列の中にいた誰かが宣言する。それを受け、嫁入り行列はこちらに向かって来たときとは比べ物にならぬ速さで街道を戻って行った。

狐火が遠ざかり、やがて見えなくなってしまうと——先ほどの狂乱騒ぎがまやかしに思えるほどの静寂が、清四郎たちを包み込んだ。

ふっと空を見上げて、清四郎は気付く。

「雨が……やんだ」

その呟きを聞いてのことかは分からぬが——狐が去った後もふらふらと揺らめいていた小男が、

糸の切れたようにぱったりと倒れる。

鎖鎌がじゃっと鳴った。

「弥助。おい、弥助」

慌てて駆け寄り、隣りにしゃがみ込んでぺちぺちと頬を叩く。

しかしぴくりとも反応がない。す、と清四郎から血の気が引いた。

先ほど動きすぎたせいで心臓でも止まってしまったか。

「弥助！」

もう一度呼びかけ、薄っぺらいの胸の上に手を置いたそのとき。

げっふう、と。

銀杏よりも強烈な酒気が清四郎の顔を直撃した。

「……お前」

今までで一番怒りを煮詰めた声が口から洩れたが、酔っ払いはそのまま高いびきをかいて眠りこけている。

小袖の襟先を巻き込んだまま固く握った拳を、暫く震わせていた清四郎だが、ふいに先ほどの弥助の言動について考えた。

あれだけ物の怪を恐れていた男だ。自分なりに策を練っていたとしても、此処に来るのにどれだけ勇気が要ったか知れん。

命が惜しくて江戸から逃げた、侍でもないこの男が、藤籠背負って走りだすのにどれほど意気

を奮っただろう。

先刻の暴れっぷりは——酒の力を借りなければ、元来の弥助にとってはどだい無理な芸当だったのではなからうか。

……この酒乱め。

なんだか馬鹿馬鹿しくなって、清四郎はどさりと尻持ちをついた。

「羽織も焼けたし、肩も焼けた。これくらいなら医者にかからずともなんとかなるが、諏訪の町で羽織は買わねばなるまい。刀は狐の落としていったものがあるから今のところは良いとして……着物代と、俺たち二人が食える分だけ、なんとか金は稼がないとな」

やれやれといった響きには、わずかに優しさが滲んでいた。

侍は照れ臭そうに、隣で眠る連れ合いに向けたような独り言をつぶやく。

「肥後へと向かう道すがら、二人で助け屋でもやるか。なあ、弥助」

長谷川清四郎は街道の真ん中にごろりと寝転び、満足気に細めた眼で、山向こうから登る朝日を眺めていた。

(文学部歴史学科二年)

五月の野辺送り

虹野 アキラ

黒々とした地面に無残に散らばる個体たち。

紗希はそれをぼんやりと見下ろしている。

それがやがて意味を成さないほどぐずぐずになってしまえばいい、とわたしは願う。
唆したのはわたしだ。今更後悔はない。

多分、これでよかったんだ。わたしが親友としてアドバイスできる、最も気の利いたものだったと思う。

安藤菜月は考える。

高校生は忙しい。朝早く起きて慌ただしく学校へ行って、勉強して部活してへとへとになって家に帰る。お風呂とご飯のあとにお母さんやお姉ちゃんとおしゃべりするのがつかの間の休憩。

そして寝るまで勉強。

進学校に進んで新体操部に入った私の毎日はこんなことの繰り返しだ。いつもせかせかしていて、常にこなさなければならぬことが付きまといていて。中学生の頃は見るともなしに見ていたテレビも、今では朝ご飯と夕ご飯のときに見るだけになった。好きだった本も読まなくなったし、買い物にも減多に行けない。行くとしても、いつも時間を気にして出かけることになる。好きなことまでしようとしたら一日二十四時間じゃ足りない。

こんなことでいいんだろうか、わたしの青春。

そんな気持ちの前では、普通科に進学するのは自分で決めたことだから、という聞き分けの良い自覚なんて無力だということはおわたしが一番知っている。

最初は自分の意思で忙しくしているつもりだったけど、すぐにそんなものは怒涛の予定に飲み込まれて分からなくなった。目的と忙しさが逆転して、何のために忙しくしているのかを見失う。激流の中で溺れながら、わたしの生活は学生の本分と言う実態のない強迫観念に支配される。何で色んなものを犠牲にしてこんなに勉強しているんだろう。単なる不満じゃあない。純粹な疑問だ。勉強してきたんだろ、はい、そうです。じゃあ寝る間も惜しんで問題解いてこい。真面目な私は、言われたことをこなそうと努力する。与えられた忙しさに応えようとする。頑張っても間に合わない。頑張るだけじゃ認められない。期限に間に合わなければ認められない。期限に間に合うように目の前のことを片付けることに焦点が合わせられる。上滑りの知識。結局わたしは理解するための時間を確保できない。ああ、勉強ってなんでしたっけ、先生。空欄をとりあえずう

めてくることですか。

近頃の商業高校の同世代の女の子たちを見ると、少しうらやましくて妬ましい。

わたしが四苦八苦してなんとか溜め込んだ数学の公式や英単語、世界の歴史なんて石ころみたいなものだ。冷たくて重くて、あとから振り返っても雑多な記憶の中に静かに沈んでしまっている。そう。

それに比べて、道行く軽くてふわふわした女の子たちはわたしがとりこぼした楽しいあれこれを含んだまま持っているように見える。将来のために、と大人が言うのは分かるけれど、近い未来のことぐらいはちょっと準備して、あとは今をなるべく楽しく生きようとしている彼女たちはなかなか賢い生き方をしていると思う。

わたしはもういろいろなものを取りこぼしているような気がする。昨日見なかった人生観を覆したかもしれないドキュメンタリーのテレビ番組、撮れずじまいになっている十七歳のわたしのプリクラ、削った睡眠時間に見るはずだった夢、それから、それから。

大切にしているはずの親友について想いを馳せる時間とか。

林田紗希は顔を上げる。

四月半ば。朝はまだ空気がひんやりする。日の当たらない教室は、気を抜くと足元に冷氣が忍

び寄る。

教室の入り口に掛る時計を眺める。七時十五分。うん、まあこのくらいの時間で、と思ったところで声がした。

「紗希、おはよう」

廊下側の窓の向こうで、私の親友が手を振っている。歳をとっても、クラスが変わっても、この習慣だけは変わらない。お互いを確かめ合う、ただそれだけなのに、ずっと続いている習慣。かれこれ八年になるだろうか。

「おはよ」

笑ってそれに応える。直後、しくじったと思った。

ああ、今の笑顔には力が入ってない。菜月は不審がるだろうか。違う、菜月に挨拶するのが嫌なわけじゃない。どうか、今の投げやりな笑顔は眠たいだけだと勘違いしてくれますように。

今更繕うこともできなくて、私は冷や冷やした。が、菜月はにっこりと微笑み返して自分の教室へと向かった。菜月は何も思わなかったようだ。

少し、物足りない感じがしつつも私は安堵した。

知られるわけにはいかない。知られたくない。

一度は、打ち明けてみようかと思った。解決することはないのに、それでも、言えば楽になるような気がして。

でも、菜月は忙しいんだから、そんな菜月の貴重な時間を削ってまで聞いてもらうのはよくな

いと思った。私も菜月とは違う意味で忙しい。高校生になって私たちの時間は重ならなくなった。家が同じ方向にあるにも関わらず、中学生の時みたいに一緒に帰らないのはお互い時間に追いつまわられているからだ。

それに、失ったものを取り戻すことはできないと知りながらこの気持ちを吐露するのは、単なる愚痴にしかならないのだと気がついた。

愚痴を言っではいけない。それは自分でよく分かっていた。愚痴を言ってしまったら最後、もう理性的な解決が思いつかなくなって、物事を感情で判断する人間になってしまいそうで怖い。私は、そういう人間には絶対なりたくない。

愚痴を言っではいけない。愚痴を言っではいけない。既に大切なものを損なってしまったこの私が、これ以上醜くならずに凛として在るために、愚痴を言う人間にはならない。そこまで弱い人間にはなりたくない。

今になってどんなに強く正しい人間でいようとしたって、もう認めてはもらえないのかもしれないのだけれど。

それでも、私は償い続ける。この先誰にも許されない罪を。

机に向かう。小さな袋を取り出す。赤を選ぶ。足元が寒い。冷えた右足と左足の脛辺りをすり合わせる。

指先に力を込める。爪の先が白くなる。指先も冷たい。指が赤を重ねる。それは私の指の先で。だんだんと、小さく、小さくなっていく。

もう、私にできることはこれしかないのだから。

安藤菜月は追われる。

忙しい日常が始まる、追いかけてくる。そして時にはわたしを追い越して、わたしの時間を無遠慮に引き裂いていく。

いつも通り紗希に挨拶をした後で教室に向かった。

「菜月ー、おはよう」

席に着いてさっそく声をかけてきたのは不吉な予感のする友人。教科書を鞆から出しながら嫌そうな顔をして見せて、

「おはよう、今日は何借りに来たの？ 古典？ 化学？」

「やだなあ、朝から人聞きの悪い。口語訳も練習問題もちゃんとやってきたもん」

「え。……なんだ」

「何よそのめずらしそうな顔！ たまにはちゃんとやるんだって」

久々に自力で宿題をしてきた万年さぼり魔は偉そうに手をひらひらと振って、でもね、と言った。

「英語の予習はしてないの、はあと」

ばしっ。ちょうど取り出していた英語のノートを思いっきりたたきつける。

「いったあ」

「予習・宿題耳そろえてから威張りやがれ！」

「耳そろえて、ってこわあい」

悪かったね。予習してない自分を棚に上げてかわいこぶってる悪友に悪態をつき、それから不気味なほど思いっきり微笑んだ。

「文句あるなら借りなくていいんだよ？ あんたが大塚に叱られて授業中空気椅子するだけだからね？」

「うわごめん、ごめんなさいーっ、と慌てふためく彼女をもう一度小突いてからノートを渡して、ふとジャージの入った手提げがないことに気づいた。

「あれ？ 確かに持ってきたはずなんだけど……」

「何？ 忘れ物？」

「ジャージがない」

「靴箱に置きっぱなしじゃない？ あ、自転車のカゴとか！」

確かにそうかも。HRまであと五分だ。面倒だけど、わたしは慌てて心当たりのある場所を確認しに行った。

結局手提げは靴箱の上にあった。無意識に置いてしまっただけで取り忘れたんだろう。

先に自転車置き場から見に行ったせいで、H R 開始ギリギリの時間になってしまった。わらわらとそれぞれの教室に入っていく生徒たちの間を駆け足ですり抜ける。四月の朝は、まだ空気が冷たい。風を切るとそれが分かる。首元や袖口が冷える。走りながらちりちりと紗希のクラスを覗く。

後ろから二列目、窓の近く。背中をかがめて一心に机に向かう紗希。黒い髪。髪の艶。手元でぱたりとひらめく赤。

ん？ 赤？

通り過ぎる一瞬に見えた光景を反芻して、疑問符が浮かぶ。紗希は何してたんだろう。

なんとかチャームが鳴る前に滑り込んで、「あった？」と身を乗り出す友人に素早く「あったよ」と笑顔を見せる。丁度入ってきた担任が週番に号令を促す。

担任の話を聞きながら、思考はさっき見た光景に傾いていった。

あれはどこかで見たような色と手つき——そうだ、紗希は折り紙を折っていた。

ああ、あれは赤い折り紙だ。正体が分かかってちょっとすっきりしたけど、なんでまた、折り紙なんて折ってるんだろう。いや、別に折ったって悪いわけではないけれど。

もやもやする。折り紙、どこかで誰かと話題にしたような気がするのに、思い出せない。膝の上に置いた手の、指先が冷える。手のひらで指先を包み込む。

あれは何だったかなあ。思い出せない何か引掛かる。

しばらく掴めそうで掴めない記憶を手繰っていたけれど、不意にH R が終わって思考は中断さ

れてしまった。間髪入れずに菜月、と背後から呼ばれる。

そうして部活仲間から練習メニューの相談を受けたわたしは、さっきまで考えていたことをきれいさっぱり忘れてしまった。

林田紗希は思い出す。

そういえば、最近菜月と一緒に帰らないな。

最後に一緒に帰ったのはいつ頃だったか、と考えて、それはもう随分前のことだと気づく。菜月は部活があるから当然だといえは当然なんだけど。ああ、四月末だというのに、やっぱり夕方は薄ら寒い。私は首を竦めた。自転車漕ぎながら、隣で菜月が自転車を漕いでいた季節に想いを馳せる。今よりは暖かかった気がする。でも、夏でもなかったような。

確か宿題が多すぎる、って話をした。そうだ、ゴールデンウィークの宿題が多すぎるという話をしながら帰った。

私たちは五日の休みで各教科の問題集一冊ずつを宿題にするという高校生ならではの無茶な課題にげっそりしていた。なんとかやりきったけどさー、部活もあるんだから寝る暇なかったよ、と菜月が嘆いていた。

うん、あの頃といえは教育相談期間だな。

私たちの学校では、五月末に教育相談期間がある。これは家庭訪問の逆バージョンみたいなもので、割り振られた時間に親が学校に来て、親、生徒と教師で成績や進路について話す。この期間はいつもより授業が一時早く終わる上、部活が休みになる。部活をしていない私はあまり特別な期間だとは思わないけど、菜月いわくの「一年で一番嬉しい期間」。部活が忙しそうない菜月には、確かに一番ゆっくりできる時間なんだろうな。今日も体育館で練習に励んでいるんだろう。中学の時に一緒に始めた新体操、私にはできない技を、菜月はもうたくさんマスターしているんだろう。

一緒に帰ったのは一年も前か。そんなに前だったっけ。もうすぐゴールデンウィークがやってきて、それが終われば今年の教育相談期間だ。

そういえば母さん、そろそろ教育相談期間になるって分かっているのかな。家に帰ったら言っておこう。一応しばらく前には言っているけど。仕事の休みはもらえたのかどうか確認するのを忘れていた。何も言わないところを見ると、多分大丈夫だったんだろう。

今日は何時に帰ってくるかな。

私は、唯一の家族にぼんやりと想いを馳せる。

夕飯は焼きそばにしよう。玉ねぎをきらせていたから買って帰らなきゃ。

体操服乾いてるかな。明日の朝用に、炊飯器のタイマーをセットしておくの忘れないようにしないと。それから英語のプリント、数学の問題集、プリント、地理の過去問、各教科の予習。

盛大に溜め息を吐こうと大きく息を吸ったら、自転車を漕ぐのと同じ速さで涼しい外気が肺を

満たした。

春は、まだ寒い。

安藤菜月は目をこする。

時計を見ると午前二時前だった。ああ、もうこんな時間。早く寝たい。あと数学の問題集を二ページしたら全部終わる。頑張れ自分。

機械的にページをめくりながら、それでも去年のゴールデンウィークよりはましだと思う。宿題は去年より多少増えているんだろうけど、一年も高校生をしていれば冗談みたいな宿題の量にも慣れてくる。苦しいことに変わりはないけど、そんなもんだと思えるようになったんだろう。

去年は結局一時間しか寝られずに学校に行った。今年はもう少し寝られそう。もうちょっとで終わるから。

働け、頭。因数定理、割り切れるための条件は、ああこれ苦手だ、教科書とにらめっこ、多分、これで、 $a \parallel 4$ 。次、解と係数の関係、これはできる、アルファプラスベータは、マイナスイブんの……。

だめだ、起きろ。混迷する思考を叱咤する。何度も自分を励ましながら、やっと最後のページに取り掛かる。

同じ調子で解き進めていると、半分ぐらいのところわたしは舌打ちしたくなった。集合の問題、ド・モルガンの法則。

なんかあったなあ、こんな法則。どんな法則だったっけ。今開いている数Ⅱの教科書には載っていない。眠い。ささと終わらせたい。

考えても思い出せそうになかったので、諦めてわたしは数Ⅰの教科書を引っ張り出した。そう、これだ……

なんとか思い出して、やっと全問題を解ききった。伸びをする。あーあ。毎回思うけど、いつもより長い休みのほうがいつもより忙がしい気がする。嵐のような四日間を思い返す。

まあいいか、とにかく終わったんだから。わたしは何度目か分からないあくびをした。

ささと明日の準備をして寝よう。明日は全校朝礼の前にユリエに部活日誌渡し、顧問のところに行かなくちゃ。うっかり忘れないようにしよう。

机の上の筆記用具を片付ける。久しぶりに取り出した数Ⅰの教科書をばたん、と閉じる。

「あ」

懐かしい。教科書の裏にプリクラが貼ってあった。紗希とわたし。

「いつ撮ったっけ……？」

右下に日付が書いてある。五月二十六日。そうか、去年の教育相談期間か。

高校の制服姿、まだ撮ってないよねって言って、高校一年生の紗希とわたしはプリクラを撮りに行った。制服も髪型も変わらないのに、やっぱりどこか幼いわたし。わたしの隣でピースして

る紗希も、やっぱり幼い。紗希はわたしより大人っぽいけど、今のわたしとこの紗希だったらわたしの方が大人っぽいかも。

うん、懐かしい。しばらくプリクラも撮ってないなあ。たまには遊びに行けたらいいのに。最近紗希と学校以外で会ってないし。

喋り出したら止まらないだろうな、お互い。二人ともお喋りだから。考えていたら、無性に紗希と話したくなった。部活の話とか、勉強の話、進路のことも話したい、話したいし、聞きたい。あと、最近ハンドボール部の高橋君のことが気になってる、っていうのも話したい。紗希も高橋君のこと知ってるけど、どんな反応するかな。

ああ、久々に思いつきり喋りたい。あと二週間もしたら教育相談期間だ。紗希と一緒に帰って、いっぱいいっぱい話そう。

楽しい予定の目途が立って、現金なわたしは眠いのを忘れていた。はっとして時計を見ると、三時を過ぎていた。ああ、早く寝よう。

五月になって、やっと優しい暖かさが吹き込むようになった窓を閉める。
いつもより安らかに眠れるような気がした。

林田紗希は目を瞑る。

昨日から続く頭痛に閉口して、眉間を強く押す。少し楽になる。今度は後頭部から首にかけて揉みほぐす。

頭痛の原因は肩こりだということは分かっている。慢性的に肩こりだけれど、たまに耐えきれないほどこりが溜まると頭まで痛くなる。

「はあ……」

今日は宿題が早く終わった。まだ一二時ちょっと過ぎだ。日付が変わっているのに『まだ』だからなあ。自分の生活がすっかり高校生のサイクルになっていることを思い知る。

せっかく時間ができたから。

小さな袋を取り出す。青を選ぶ。

指先で、順を追って小さくしていく。

青。あの日、目を閉じて、一生目を開けることのなかったおばあちゃんの傍らに置いてあった箱もこんな青だった。紺に近い、青。私は妙にはっきりとその色を感じている。

ああ違う。私は無意識に奥歯を噛みしめる。

覚えているんじゃない、忘れられないんだ。だって、だって。

おばあちゃんを殺したのは、私だから。

去年の秋から繰り返している呪詛を心の中で呟くと、心臓の辺りが引き攣れるような気がした。

心はやっぱり心臓の辺りにあるんだろうな、とどうでもいいことをどこか遠くで思う。

おばあちゃんを殺した私は、ただの青い紙を青い鶴に変える。黄色い紙を黄色い鶴に、緑の紙を緑の鶴に。たくさん、たくさん。

殺した私が鶴を生みだすなんて馬鹿げていると思う。でも、もうこうすることでしか償えないと思うから。

最近やっと夜も暖かくなってきたけど、鶴を折るときの指先はいつだって冷えているような気がした。

安藤菜月は思い出す。

昼休みに空き教室で部活のミーティングがあった後、紗希の教室の前を通った。

そうだ、明日、教育相談初日だけ一緒に帰れる？って聞いてみよう。

二週間くらい前に思いついた楽しい予定を紗希に打診してみなくっちゃ。わたしははりきって教室を覗き込んだ。

高校一年の最初と一緒にお昼ご飯を食べていたけれど、わたしが部活を始めてからは一緒に食べられなくなった。昼練かミーティングがあるから、お昼ご飯はさっさと食べなくてはならないからだ。

紗希は確かアリサとかチカとかとご飯を食べているはず。そう思ったけど、もう昼休みも半ばを過ぎて、お弁当を食べているグループはほとんどいなかった。それもそうか、と思い直して、紗希の机を見る。

紗希はいなかった。それはいい。歯磨きかもしれないし、トイレかもしれない。

紗希はいない。代わりに、英語の教科書が机の上に置いてある。問題は。

教科書の下から見えている色。赤、薄桃色、薄水色、紫。

折り紙？

しばらく前も、確か紗希は折り紙を折っていた。

あの時も、わたしは何か考えたような――

「菜月！、どしたの？」

キョトンとした顔で教室を覗き込んでいるわたしに気がついて、友達が生を掛けてくる。まただ。思考が中断される。

「紗希探してるんだけど」

紗希ちゃんならトイレじゃない？水道にはいなかったと思うよ、と答える友達にそっかあ、ありがと、とお礼を言ってさっさと引き下がる。

折り紙のことがひっかかる。この間考えられなかったその先をちゃんと辿らなきゃ。誰にも邪魔されなくなかった。自分の教室へ足早に戻りながら、集中して記憶を探る。なんだっけ、折り紙の話題、自分の席に座って頭を抱える、紗希、折り紙、折り紙、折り紙、折り紙――

折り鶴。

思い出した。

折り鶴だ、千羽鶴だ。紗希が作るって、おばあちゃんに。そう言っていた。いつだ、あれは夏服を着ていた、夏課外の時、そう、わたしも折った。

すっかり忘れていた記憶が鮮やかに、連鎖的に浮かび上がる。紗希が、紗希らしいさっぱりとした笑顔で言う、「そんなに心配しなくて大丈夫みたいだね。」

あの時の紗希の言葉を思い出す。おばあちゃんが胃がんになって入院することになったから、千羽鶴を折るんだ、って言っていた。

「もともと食欲旺盛なのに、なんか最近食べなくなったな、って思ってたら胃がんだった。まだ手術でなんとかなるぐらいの進行らしいから、早く元気になって帰ってきてほしいんだ」

紗希の家は母子家庭で、おばあちゃんも一緒に住んでいた。わたしが紗希の家に遊びに行っていた頃、わたしも何度か会ったことがある。元氣、というか、ハキハキした人だった。紗希とおばあちゃんはすぐく仲が良かったけど、わたしの見る限りでは紗希を甘やかして仲良くしているんじゃないくて、紗希を対等に扱うから仲良しなんだと思う。そんなおばあちゃんだった。

わたしも作っていい？って聞いて、十羽ぐらい黙々と折った。

そんなことがあった、去年の夏。そこまで思い出して、やっとすっきりした。けど。

半年経っても紗希はまだ鶴を作ってるの？

おばあちゃんのために？すぐ治るんじゃないかなかったの？辻褄が合わないような気がしてわたしは

額に手を当てて考える。そういえば、おばあちゃんが元気になったのかどうかわたしは聞いていない。その後その話をしなかった。

紗希は、未だにおばあちゃんのために鶴を折っている？

どこか腑に落ちない。何かおかしい。わたしは急に不安になった。

気になるから紗希に聞いてみよう、と席を立った私の耳に、掃除開始のチャイムが響く。階段掃除係の友達がわたしを見つけて、「菜月、掃除行こ」と促す。

時間切れ。箒を持ちながらわたしは忘れないように強く決心する。胸騒ぎがする。絶対紗希におばあちゃんと千羽鶴のこと聞いてみよう。

安藤菜月は足を止める。

本当は、いつだって気がつくチャンスはあったんじゃないかと、わたしは赤い鶴を拾い上げながら思った。

絶対に紗希に聞いてみるんだ、と決めたのが今日の昼休み。あのときは掃除開始のチャイムに邪魔されたけど、「忘れるものか」と意識していれば、案外簡単に意識の網に引っ掛かるものなんだな。六限目が終わって廊下に出たわたしは、ふと廊下の隅に赤いものが落ちているのを見つけた。

多分これは紗希が作った鶴だろう。わたしは手の中の鶴を思う。終礼が終わったら、これを紗希に渡しに行って、明日一緒に帰れるかどうか訊こう。忘れないうちに。後回しにしないように。先生の話が終わって、解放される。いつもよりちょっと長引いた。紗希のクラスはもう終わってるかな？

鞆を掴んで慌ただしく教室を出ようとしたら、

「安藤さん」

どきり、とする。この声は高橋君だ。さあっと頬が熱くなる。やばい。顔、真っ赤になってるかも。なんとか平静を装って振り返る。

「なに？」

いつもだったらすぐ嬉しことなのに。今は素直に喜べないのがもったいない。

「今日の体育館の半面、新体操部が使うんだよね？」

うん、そうだよ、と答えながら、確かもう半面は高橋君たちハンド部が使うことになっていたことを思い出す。なんだろう、全面使わせてほしいとかの申し出だろうか。それはいくらわたしが部長でも決められることじゃないから、どうか顧問に聞いてほしい。

気を揉むわたしの心の内を知らない高橋君が一瞬悩むのが見える。ああ、特に用事があるって呼びとめたわけじゃないんだ。用事がないのに話しかけてきてくれるってことは、という都合のいい解釈と、用事がないなら話しかけないで、という気持ちが綱い交ぜになる。

「いや、こっちからボール転がったらごめんね」

体育館を共有するときは、半分のところに網を張ってお互いの競技を邪魔しないようにして使うけど、たまに勢い余ってボールが飛び込んできたりする。一瞬悩んだ高橋君がなんとか捻り出した口実。

「あ、うん、こっちこそフラフラ飛んでいったらごめんね！」

多分わたしは高橋君のことが好きだ。無理矢理な口実も邪険にできずきちんと答えてしまうぐらいに。それでも、今はそんな話どうでもいいと思う。早く紗希に追いつかせて。

尚も何か言いたげな彼に、じゃあお互い頑張ろうね、と言って話を打ち切る。そのまま教室を飛び出した。いつもだったら高橋君の声を何度も思い返すだろうけど、あいにく今日はそれどころじゃない。

三秒前のことをすっかり忘れ去って、わたしは紗希の教室へと急いだ。

紗希は、もう教室にいなかった。

アリサがわたしに気づいて手を振る。

「どしたの？」

「ねえ、紗希帰っちゃった？」

もう帰ったよ、と言われて脱力する。間に合わなかった。

しょうがない。明日にしよう。部活に行かなきゃ。わたしは溜め息を吐きなくなった

用事あったけど明日でいいや、と苦笑して踵を返しかけたわたしの手元を見て、アリサがふと

言った。

「紗希の鶴だ」

「え」

「これ、紗希が作った鶴でしょ？」

何故かぎくりとする。なんでアリサも知ってるの、と思ったけれど、同じ教室にいればそれは気づくか、と納得した。じゃあ、アリサは紗希のおばあちゃんの話も知ってるのかな。

「そうなの？　これはさっき拾っただけなんだけど。なんで紗希は鶴なんか作ってるんだろうねー？」
何も知らない風を装って、おどけたように訊いてみる。アリサはあっさりと答えた。

「気分転換、なんだって」

気分転換？　予想外の答えに困惑する。おばあちゃんは関係ないの？

「勉強ばっかじゃつまらないでしょ？　だからたまに鶴作るんだって。紗希ってほら、細かいこと好きじゃん？」

中学生の頃から紗希ともわたしとも仲がいいアリサはそう言った。

なんだ、ただそれだけだったのか。どうりで未だに鶴を折っているわけだ。深刻な何かを予想していたわたしは自分に呆れた。蓋を開けてみれば何のことはない。紗希に問い詰める前でよかった。危うく恥ずかしい思いをするところだった。

わたしが内心安堵していることなんて知る由もないアリサが伸びをしながら、でもさ、と言った。

「最近暗いよね」

「何が？」

「紗希だよ。ノリが悪いっていうか……勉強のしすぎだよ。根詰めすぎな気がする」

「……そうかな？」

まあ紗希も真面目だから頑張っているんだろうけど。暗い、ということを感じない。

「紗希ってそんなに暗い？」

「うん。口数減ったし、あんまり笑わない。菜月はそう思わない？」

まだ二年なんだからさ、そんなに神経とがらせなくてもいいとあたしは思うけど、とアリサは頬杖をついた。

「まあ紗希は何がなんでも頑張って、一発でいい大学行きたいんだろうね。おばあちゃん亡くなっ
てからなんか変わったじゃん」

いい大学行っていい仕事に就いて、お母さんを楽にしてあげたい、って前言ってたし。目標があ
ってえらいよね、あたしなんか全然将来のこと考えてないよ、とおしゃべりを続けるアリサの
前で、わたしの思考は凍っていた。

今、なんて。

「……紗希のおばあちゃん、亡くなったの？」

「あれっ、聞いてない？ 随分前に亡くなったよ」

「知らない」

予想以上にショックを受けているわたしにびっくりしながらもアリサは続ける。

「確かにあたしも本人から聞いたわけじゃないから、菜月も知らないかあ」

でも菜月には話してるもんだと思ってた、と言われて、わたしは最近の紗希のことをほとんど何も分かっていないことに気づく。

今朝も紗希に挨拶したことを思い出す。その笑顔はいつもと変わらないように見えたのに。もしかして、紗希はわたしに笑顔を取り繕っているのだとしたら。

安藤菜月は走り出す、

自転車のかごに鞆を投げ込んで、漕ぐ。暖かい風が全身にぶつかってくる。

フライングだ、教育相談期間に聞こうと思っていたのに。でも、わたしは引き下がっちゃいけないと思った。部活は、通りかかった後輩に「今日病院行くから休むって言っておいて！」と言い捨てて逃げてきた。目標が絞られると、あとのことは案外どうから休むって言うておいて！」と確かに今日までは忙しい、だけど忙しさなんて、与えられた優先順位なんて、追い越してしまえばそれまでだ。

紗希、気分転換に鶴を折るなんて嘘でしょ。アリサは、もともと紗希がおばあちゃんのために鶴を折っていたことを知らなかったみたいだけど。

わたしはそこが地続きなのを知っている、ねえ、もしかして。

いつも通りの通学路を逆走する。まだ間に合うかも。この道を通っていればの話だけど。
祈るような気持ちで風を切る。

直線、突っ走る、左手にコンビニ、左折、いない、交差点、突っ切る、まだ見えない、暖かな
空気、汗ばむ、緩やかな坂を上る、ふくらはぎが熱をもつ、息が上がる、追いつけないかも、顔
がゆがむ、カーブする、前方に見知った黒髪のセミロング。

「紗希！」

林田紗希は振り返る。

ブレーキをかける。私を呼ぶ声。

「菜月？」

林田紗希は繰り返す。

おばあちゃんを殺したのは私だ。

確かに、医学的には胃がんの手術後、体力の衰えによって肺炎にかかり、肺炎で亡くなったこ
とになっている。医学的には。

じゃあなんで胃がんになったのか。あんなに元気だったおばあちゃんが。私の大好きだったお

ばあちゃんが。

大人になったら、いっぱい恩返ししようと思っていた。おいしいものを食べさせて、行ったところのない所へ連れて行って。

もちろん一生懸命働いて、私を養ってくれているお母さんにも恩返ししたい。だけど、今の私の私らしい部分は、おばあちゃんから学んだことだ。愚痴を言うてはいけない。強い人間、でもとげとげしくなっていけない。おばあちゃんは私の思い描く『立派な人』の模範だった。

いつまでも元気でいられる人だと思っていた。病気とは縁のない人だと。そう信じたかっただけなのかもしれないけど。

胃がん。中学三年生の秋ぐらい、病院に行く前から、おばあちゃんは小食になっていた。最近痩せたね、なんて呑気に話していた。呑気そうに見えたけど、あの時本当はすごくしんどかったんじゃないだろうか。

そんな素振りを見せずに、私の高校受験を支えながら、おばあちゃんは家事の一切を担ってくれていた。いつも笑顔を絶やさずに。

私が体の異変に気がついたのは、おばあちゃんが血を吐いた時だった。高校に通い出してすぐ。それまで気が付かなかった。

体の具合が悪いのに、無理を圧して頑張っていてくれたからだろう。診断の結果、胃がんの進行はまあまあだったけれど、体力の低下がひどかったそうだ。

まだ六十代前半ということもあって、体力の回復を見ながら手術でがんを除去することになっ

た。それはよかった、手術は無事成功したのだから。

だけど。体力を消耗したおばあちゃんは、運悪く罹ってしまった肺炎に打ち勝つことができなかった。

私のせいだ。もっと早く病気に気づいていれば、もっと手伝いをして負担を減らしてあげていれば。それに、私は。

絶対にしてはいけない八つ当たりをした。

よかった、追いついた。わたしを見て驚いている紗希にとりあえず微笑む。並んで停車した自転車をつっくり漕ぎだす。

「一緒に帰ろ」

「帰るって……部活は？」

二メートル置き去りになった紗希が慌ててついてくる。さぼってきちゃった、たまにはいいでしょ。お茶目に言ってみるけれど、追いついた紗希はなんとも言えない顔をした。

「菜月がさぼるって……めずらしい。っていうか、なっちゃん部長でしょ」

ほんとに大丈夫なの？ と念を押す。確認されても、わたしは怯まなかった。

「うん、いいの」

はっきりに言いきったわたしをまじまじと見つめて、紗希はそれ以上何も言わなかった。

追いついた、一緒に帰ることを納得させた。ここまではよかったけど、その先を考えていなかった。どうしよう、どうやって切り出したらいんだろう。

ああ、黙ってるのも不自然だ。突破口を探して紗希をそっと見遣る。
あ。

なんとなく、アリサの言ったことが分かった。

視線を斜めに落としている紗希は、確かに昔と違っていた。上手く形容できないけど、全体に薄暗い影が染みついて、紗希の明度を下げている感じ。

遠回りで核心に近づこうとしてみたけど、そんなのじゃダメだ。紗希を見て心が叫ぶ。手順なんてお行儀のいいものは捨て去れ、核心に切り込め。

ゆるゆると進めていた自転車速度を上げる。

「菜月？」

急に加速したわたしに、紗希が再び置き去りになる、三メートル、五メートル。

紗希はきっとついてくる。わたしは自分が勝手に決めた目的地を一心に目指す。

ガシャン、と手早く自転車を止めて、小学生の頃あしげく通った公園へ駆け込んだ。後ろから紗希がきちんとついてきていることを意識しながら。

「なっ……」

言葉を遮るように、振り返る、無意識にポケットをさぐる、手を突き出す。

「これ」

手の平の赤い鶴を見て、紗希の表情がずっと抜け落ちた。明度が、一層下がる。無表情の下に、よくないものが渦巻いているのを察する。紗希、何を隠しているの。

「紗希」

声が少し掠れた。ああもう。止まるな、堰を切れ。勢い込んで、悲鳴のようになった。

「勘違いだったらごめん、紗希、わたし気になってるんだけど、おばあちゃん亡くなったんだってね、なのにどうして、どうして鶴を折り続けているの、紗希にとって鶴を折ってる意味は何、本当はもう、もう意味なんて無くなっているんじゃない」

忙しさと目的が逆転したわたしの勉強のように。紗希は紗希の波に溺れて、ひたすら鶴を折ることが紗希を支配して、しかも紗希はもう意味を完全に失ってしまっているのだ。だって千羽鶴を届けるべきおばあちゃんはもういなくなってしまうているのだから。

おばあちゃんが亡くなったことを知ってから、さっきまでぐるぐるとわたしが考えて辿り着いた、推論。

「千羽鶴を作り終わる前に、紗希のおばあちゃんは亡くなってしまったんだね」

わたしの勢いに圧倒されて、目を見開いて聞いていた紗希が、呆然として、言った。

「なんで分かったの」

あ、この表情は。

昔から、紗希が泣く前に見せる表情だ。

ああ、わたしはこんなに紗希を知っていて、こんなに紗希を知らなかった。

わたしにこれを言う資格はないだろう。だけど。

決まってるじゃん、親友だからよ、ってわたしが強がって笑ってみせると、紗希は多分ずっと堪えていた涙を一筋流した。

菜月は泣きそうな顔で、それでも笑った。その瞬間、私の目を覆っていた水分は表面張力を失って自由落下した。

菜月に私は何も言わなかったのに。なのに菜月は私が押し隠していたことを暴いた。

端っこを崩された虚勢は、止める間もなく崩れていく。私の視界は拭っても拭いても溢れてくる涙で霞む。私の意思に反して鳴咽が漏れる。

ああ菜月、こんな姿絶対に菜月に見られたくないとい今まで思っていたけど、今は気づいてくれたのが菜月でよかったと思う。

菜月が近付いてくるのが気配で分かる。歪んだ視界の向こうに居るはずの菜月に向かって、声

を絞り出す。

「菜月、の言う、通りで、わた、しはおばあ、ちゃんに」

「やっぱり、渡せなかったんだね」

上手くしゃべれない私の言葉を菜月が掬う。責めている声色ではなかった。寧ろ私を宥めるような。

千羽鶴を作ると決めたのは私自身だった。それなのに私は、七百羽ぐらい鶴を折ったところで、嫌になってしまった。

おばあちゃんが入院して、家事の負担は私にのしかかってきた。更に、勉強もどんどん難しくなる。溜まっていく疲労。自分が変化のない毎日に消費されていくという絶望、焦燥感。

なんでこんなことしてるんだろ。もう疲れた。

ある日の私は、そう思ってしまったのだ。

自分で決めたのに、自分が苦しかったら投げ出す、幼稚でわがまま、絶対にしてはいけない八つ当たりだったのに。

丁度その頃おばあちゃんの手術が成功した。それを聞いて、もう千羽鶴は渡さなくていいか、という甘えもあった。

そのまま千羽鶴のことは忘れたふりをした。その矢先。計報。

おばあちゃんは自分が苦しくて、私をずっと笑顔で支えてくれたのに。私は同じようにして

あげられなかった。

おばあちゃんを苦しめたのは私。しかも私はおばあちゃんを見捨てた。ごめんなさい。

そうか。そんなことがあったんだ。わたしは、鳴咽交じりに血を吐くような告白をする紗希の傍らできつく目を閉じた。

紗希は自分をすぐ責めているけど、わたしが紗希だったらそこまでおばあちゃんを思うことも、我慢することもできなかっただろう。

「紗希は、がんばったよ」

嘘いつわりのないこんな言葉でさえも、紗希は受け入らない。昔から、人一倍責任感が強い紗希は、自分を責めることでしか自分を許せない人だった。紗希が未だに鶴を折り続けているのは、鶴を折ることでは自分には許されないと思っているからなんだろう。

でも。

紗希はもう許されていると思う。紗希が自分を許せなくなったら、わたしはもう十分だと思うから。

わたしがもっと早く紗希の異変に気付いていたら、紗希はここまで思い詰めなかったのかな。

こんなに泣きじゃくって、自信をなくしている紗希を見るのは初めてだった。だけどそれはわたしが初めて見るだけであって、本当は紗希にとってよくあることだったのかもしれない。わたしが気づかなかっただけで。

随分長い間一緒にいると思っていたけど、わたしは紗希の都合の良い面ばかり見て、紗希を頼ってきたんじゃないか。

ああ、わたしも紗希を追い詰めていたのかもしれない。

紗希と同じように思考が自責の沼に沈みそうになったとき。それは、天啓のように。

ひらめいた。

「紗希、その鶴って今ここに全部ある？」

紗希が持っていた鶴も、紗希の家に置いてあった鶴も全部集めて、紗希の家の庭に出した。泣き腫らした眼で、紗希は不安そうにわたしを見る。

「何するの？」

わたしは一旦自分の家へ帰って、小さな箱を持ってきた。わたしの考えが、紗希に届きますように。

「紗希、提案なんだけど」

意を決して紗希を真っ直ぐ見据える。

「ここで、一回死ぬことにしよう」

「え」

今までのわたしは、今までの紗希は、そして行き場を失った鶴は。

今日、ここで死ぬのだ。

「自分を見失っている紗希、それから紗希の気持ちに気付けなかったわたし、そして完成することのない折り鶴の」

お葬式をしましょう。

失敗したこと、後悔したことがあれば、何度だってやり直せばいい。それは生きている限りの特権だとわたしは開き直れる。

ただ、紗希は簡単に自分を許すようなそんな虫のいいことなんてできないだろう。

紗希ができないなら、私が背中を押せばいい。友達って、そうやって支えあっていくものでしょ？

紗希がゆっくり言葉を飲み込んでいく。口を開きかけたけど、音にはならなかった。そして魂がぬけてしまったように、紗希はこくん、と頷いた。

紗希が作った鶴は、二千羽を超えていたと思う。糸で繋がれてはいなかったから、遠くから見ると色とりどりの花びらみたいだ。

その小山にマッチを投じる。お葬式といっても、鶴を燃やすという、たったそれだけのことだ。わたしにとってはただそれだけのこと。赤も青も緑も黄色も、火に触れたところから黒くなって

見分けがつかなくなっていく。

紗希は押し黙ってそれを見ている。火がだんだんと広がっていく。

紗希が長い時間をかけて折った鶴。まだおばあちゃんが生きていたところに折ったものもあれば、紗希の罪悪感のかたまりもある。でも、所詮は紙なのだ。そこに、これから前を見つめて生きていくことができない程の意味を重ねてはいけない。

紗希を見る、表情は無い。

今、紗希が浄化されている途中でありますように。

私は、この世で届かなかった鶴たちに手を合わせる。まがりなりにもお葬式なのだから。うまくいけば、紗希のおばあちゃんにも届くかもしれない。

あとはわたしも、ただただ火が燃えるのを黙って見ていた。白い煙が真っ青な空に溶けていく。柔らかい風が髪を揺らす。今日が暖かい晴れでよかった。次を生きるとき真っ先に見えるのは、この五月晴れの青空だ。

火を焚いて、鶴を火葬。わだかまった白煙も、そろそろ全て空に溶けきるだろう。紗希を追い詰めていた色彩の塊は、ただの灰になって春の風に散らされていく。

五月の野辺送り

燃えた後には、新たな雫の跡を片頬に光らせて、これから生きていく先を見つめて何かがふっきれたように笑うわたしの親友がいた。

(法学部法学科二年)

選考を終えて

総評

選考委員長 小野 友道

第三回の本賞への応募は二十五編であった。学部・大学院を併せると七つの学部全領域からの応募があったことにまず敬意を表したい。

一次選考は図書館スタッフにより行われ、選ばれた八編が三人の選考委員、西川盛雄名誉教授、岩岡中正教授そして私に送られてきた。われわれ三人はまず個々に独立して、慎重にそれらを読ませていただいた。私は例年にもまして力作が揃った印象を持った。それぞれの審査委員が各々四篇に絞り、それらの評価を持ち寄り、選考会議を行った。

その結果は別記のとおりであった。四篇の選考に関してはほぼ三人の評価は一致をみたが、それでも多くの議論を重ねる必要があった。惜しくも四篇には入らなかったが作品「1／3の矛盾」も高い評価を得た。また「信長の十字架」についてもわれわれの興味を引いたが、小説としての評価が定まらず、今回優秀賞は見送りとなった。

大賞の決定には「読書の国のアリス」と「銀色のライター」の間で激しい議論がなされた。まず後者が高く評価された。冒頭部分から引き込まれ、一気に読ませる迫力と魅力があり、大賞に

との意見がかなり強くあった。ただ、ところどころ馴染めない語句や言い回しが気になり、ワープロ間違いも数か所あった。また岩岡委員が指摘しているとおり、題名がこの小説にふさわしいのか否か、私も疑問を持った。小説の題名の重要性をもう一度認識してほしい。ともあれ作者の才能は十分感じ取れた作品であった。

「読書の国のアリス」はなぜか懐かしさを覚える作品で、優しい文章で、魅力あるフレーズも見られた。また、環境問題にもさりげなく触れた優れた作品であった。ただ最後の文章に説明的で不要ではないかと思わせる箇所があり、私には気になった。今回、ワープロミスがやや目立った応募作品の中では、本作品にはそれは見られなかった。

かなりニュアンスの異なる両作品であったが、総合点で僅かに「読書の国のアリス」が上回った。両応募者には西川、岩岡両審査委員の講評を、じっくり読んで、さらに精進して作品を発表し続けてほしい。

「あやかし道中」ははじめての時代小説の応募であり、ジャンルの広がりが見られた点で歓迎したい。ストーリー性に富み、文章もいかにも巧みで、プロのにおいを感じさせる作品であった。「五月の野辺送り」も優れていた。作品の構成がユニークで、それが若者の心の揺れを描くのに効果的であった。祖母への八当たりへと祖母の死への後悔が書かれていたが、その八当たりがもう少し深化した形で描写出来ていればとの印象を持った。

ともかく、本年も選考委員をさせていただき、若者の優れた作品に接して、高齢者の私は大いなる刺激を受けた。活字離れなどが言われる今日、決してそうではなく、考え悩み、それを文章

として示すことのできる多くの若者の存在を知り、うれしくまた安心した。次回、さらなる傑作の登場を心待ちにしている。最後に熊本大学附属図書館の入口紀男館長をはじめスタッフ皆様の本賞に対する愛着と熱意そしてご苦勞に対し深く感謝し、この東光原文学賞のますますの隆盛を祈り、総評とさせて頂く。

●小野 友道（おの・ともみち）

熊本保健科学大学学長、熊本大学顧問・名誉教授、皮膚科医。

一般向け著書に『人の魂は皮膚にあるのか』（主婦の友社、2002、熊日出版文化賞受賞）、『五足の靴の旅ものがたり』（熊日出版、2007）、『オムツを穿いたネコ』（責任編集、熊本保健科学大学ブックレット1、2009）、『202本の桜―花びら遊びて』（責任編集・共著、熊本保健科学大学ブックレット2、2010）、『いれずみの文化誌』（河出書房新社、2010）

講評「表現者として言葉を磨く」ということ

選考委員 西川 盛雄

小説はどこかで自己の経験の記憶が反映されている。それを言葉によってどのように表現するかが大切になる。この文学賞の趣旨は学生諸君の知性と感性を磨くひとつの機会であると同時に物語の構成能力と文章表現能力の向上を目指すところにある。

本年度の応募は二十五篇であったが選考に残った八編の作品はそれぞれに特徴豊かなものがあった。特に大賞あるいは優秀賞に入った作品は想像力とそれを言語によって捕捉する表現力に優れたものがあったといえよう。

本年度東光原文学賞の『読書の国のアリス』は作者の記憶をモチーフに読者に懐かしさを喚起させる作品であった。「不思議の国のアリス」を想起させつつ内容は独自なもので作者個人の記憶に繋がり、失われた楽園を象徴として現代の環境の問題を想起させるものもあり、印象に残る作品であった。文体の運びのリズムと構成もよく工夫されており、読んだ後の余韻に優れたものがあった。優秀賞を取った以下の三つの作品も記憶に残るものであった。

『銀色のライター』は連載する漫画の作品〈摩天楼〉をめぐるもので、話の展開は漫画の中の

「蓮」を亡き者によって作品自体をリセットしたかった主人公の葛藤が印象に残る。読者の少女の自殺のエピソードを挿入することなど、プロットの運びに工夫が見られ、興味深いものがあった。ただ誤字などが散見されたのが悔やまれる。

『あやかし道中』はプロットの運びが軽快であったが、物の怪や怪談の雰囲気 작품을中に挿入して時代背景の江戸時代播磨期の雰囲気暗示させるものがあった。読後どころなくユーモラスなタッチで読者を飽きさせない工夫は印象に残る。

『五月の野辺送り』は出だしにある「無残に散らばる個体たち」が実は林田紗希が最後に肺炎を患って亡くなった「おばあちゃん」のために折った赤い千羽鶴を燃やした儀式の痕跡であることが判明する。全体としてプロットの運びはユニークでよく工夫されていた。作品全体を貫く菜月と紗希の交互の記述・展開は作品構成上のチャレンジングなものとして推奨できる。

他に印象深い作品として『1／3の矛盾』があったこともここに記しておきたい。この数字は人間の〈割り切れないさ〉を象徴し、「自分らしさ」を探究する青年の心を象徴的に描いた作品として捨てがたいものがあった。

小説を書く人は作品を携えて「表現者」として読者の前に現れる。その際、概ね「何を」「如何に」書くかという二つの側面が重要になる。「何を」については基本的に自由である。しかしいい作品は「如何に」の側面において際立つ。（これは軽薄な技巧を意味するものではなくしてない。）これが優れると自ずから読者の琴線に触れて「いい」作品が生み出されてくるのである。ここではたらくものは作者による作品の構想力と「言葉の力」である。小説や詩歌を紡ぎ出すと

いうことは表現者として言葉を磨くということである。これからも諸君の想像力と感性を捕捉する言語表現力への積極的な挑戦を期待します。

●西川 盛雄（にしかわ・もりお）

熊本大学名誉教授、熊本大学・学術資料調査研究推進室客員教授、放送大学客員教授。
著書に『ラフカディオ・ハーン再考』（共著、恒文社、1993）、『続ラフカディオ・ハーン再考』（編著、恒文社、1999）で熊日出版文化賞。『ハーン曼荼羅』（編著、北星堂、2008）、詩集…『半月』（葦書房、1980）、『ことづて』（石風社、1989）、歌集…『魚歌喪失』（雁書館、1983）、『風の行方』（砂小屋書房、1995）、熊本県民文芸賞・評論の部一席（1982）。

選評

選考委員 岩岡 中正

選ばれた上位4作品は、どれもレベルが高く手ごたえがあった。今日、小説（散文）の不振がいわれる中で、熊本大学の学生は頑張っているという印象で、頼もしい限りだ。今回また、隠れた才能が新たに発掘されて楽しかった。以下の作品のうち、最終的に1.と2.が競って1.が大賞となったが、私は3.もまた決して劣らないと思っている。それぞれについてコメントする。

1. 読書の国のアリス

読書というテーマを通して、私たちが大人になっても心に宿している、見果てぬものへの憧れを、若々しい感性とタッチで描いた共感のもてる作品である。確かに、やや甘く感傷的なトーンもあるものの、だれもが忘れかけた少年期への郷愁を呼び覚ましてくれる作品である。会話の部分も優しく滑らか、語り口の優しさが心に残る作品である。ただ『不思議の国のアリス』を踏まえていることのプラスとマイナスもあって、全体としてやや穏やかで、もう少し冒険してほしかった。

2. 銀色のライター

作家自身である「僕」といつの間にか作家を超えてしまった作中の主人公「蓮」との葛藤を軸に、作家とそのアシスタント、編集者、読者、世間との関係を、手なれた文章でテンポ

3.

よく展開する力が、魅力的。ありそうにないようで十分あるかもしれない、ふと軽い恐怖を覚えるような意外なストーリー展開に、読ませる力がある。会話も有効で文章の切れもよく、全体として説得力があり意欲的で、時代の雰囲気もよくとらえており、私は高く評価したい。ただ、結末がやや定型化して蛇足気味なのと、「銀色のライター」というタイトルと内容とのミスマッチが一寸惜しかった。

あやかし道中

初めての本格的時代小説の登場。作者の筆の冴えを感じさせる好読み物。登場人物と人物設定がややパターン化しているものの、描写や会話文も丁寧で的確、手なれている。化け狐との対決というストーリー自体は他愛ないが、ちゃんと斬り合いのクライマックスも用意されていて、なかなかのエンターティナーである。自分の独自のスタンスとスタイルをもち、またこれらを自分で作っていく力ももっている。これからこの調子で、どんどん書き込んでほしい。

4.

五月の野辺送り

二人の女子高生の日常と交友を描きつつ、若者らしい揺れるような繊細な心理を的確にとらえた作品。オムニバスのような場面展開にも言葉にもリズム感があって、爽やかでナイーヴな感性が魅力。ただ、祖母の死、千羽鶴、それを焼く野辺送りという展開が、ちょっとセンチで月並みか。

それぞれ以上のコメントのような長所短所があるが、どれにも未完の楽しさがあった。来年も、さらに大胆に意匠を凝らし表現を磨いて、もっと多くの皆さんに挑戦してほしい。

● 岩岡 中正（いわおか・なかまさ）

熊本大学法学部教授、大学院社会文化科学研究科長。(注)日本伝統俳句協合理事。著書に『詩の政治学―イギリス・ロマン主義政治思想研究』（木鐸社、1990）、『転換期の俳句と思想』（朝日新聞社、2002）『石牟礼道子の世界』（編著、弦書房、2006）、『ロマン主義から石牟礼道子へ』（木鐸社、2007）、『虚子と現代』（角川書店、2010）、句集『春雪』（ふらんす堂、2008）で、第50回熊日文学賞。

第三回熊本大学東光原文学賞作品集

発行日 二〇一一年三月三十一日

編集・発行 熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷

